

『大乘莊嚴經論』の諸問題  
並びに第11章求法品のテキスト校訂

舟 橋 尚 哉

はじめに	3
一 弥勒 (Maitreya) の五部論について	4
二 『大乘莊嚴經論』と『瑜伽師地論』	12
三 『大乘莊嚴經論』と『中辺分別論』	17
四 『大乘莊嚴經論』とその他の初期唯識論書	23
ま と め	28
『大乘莊嚴經論』(求法品)のテキスト校訂	35

はじめに

『大乘莊嚴經論』(Mahāyānasūtrālaṃkāra)は『中辺分別論』(Madhy-  
āntavibhāga)<sup>①</sup>とともに、初期唯識思想を伝えている重要な論書の一つであ  
る。S. Léviが1898年1月にネパールに到着し、Mahāyānasūtrālaṃkāraの  
写本を手に入れて、1907年にパリでテキストを出版し、つづいて1917年には  
同じくパリで仏訳をも出版した。このことによって、従来、『大乘莊嚴經論』  
の研究は、漢訳が中心であったが、サンスクリット・テキストの出版により、  
『大乘莊嚴經論』の研究には、梵漢対照で(後にチベット訳も参照して)研  
究されるようになった。

この『大乘莊嚴經論』の著者についても、偈頌は弥勒なのか、無着なのか、  
長行は世親が有力であるが、それでよいのかどうか、まだはっきりしていない。  
また偈頌の部分と長行の部分とが同時に成立したのか、若干の年代差が  
あるのか、かなりの年代差があるのかも、はっきりしていない。

『大乘莊嚴經論』の構成は、『瑜伽師地論』菩薩地の名称と全く一致してい  
るから、<sup>②</sup>「菩薩地」の名称を手本にして『大乘莊嚴經論』の各品の名称となっ  
たと思われる。

勿論、『大乘莊嚴經論』の各品を参照して、逆に『瑜伽論』の菩薩地の名称  
が定まったとの考えも、全く皆無というわけではないが、一般に『瑜伽論』  
菩薩地の方が成立が早いといわれているから、この考え方には少し無理があ  
るように思われる。

また、すでに宇井博士によって指摘されているが、<sup>③</sup>『大乘莊嚴經論』覚分品  
には「『中辺分別論』に説かれる如し」<sup>④</sup>という記述がある。このことは『大乘  
莊嚴經論』に『中辺分別論』が引用されているのであるから、常識的には『中  
辺分別論』の方が古いことになるが、これは直ちに『大乘莊嚴經論』の長行

の部分が『中辺分別論』の長行の部分よりも後といい切れるのかどうか。これらのことを中心に『大乘莊嚴經論』と『瑜伽師地論』、また『大乘莊嚴經論』と『中辺分別論』との関係を考察しようと思う。

また、『大乘莊嚴經論』に関する種々の問題点を中心に、『大乘莊嚴經論』とその他の初期唯識論書ということにして、『攝大乘論』や『大乘阿毘達磨集論』、更にはできれば『入楞伽經』との関係も、考察してみようと思う。

これらの考察によって、初期唯識思想の成立過程が少しでも明らかになってくれば、というのが私の願いである。まだまだ不確定な要素が多いので、不十分なままではあるが、一応のまとめとすることにした。

最後に以前、やりかけて途中になっていた『大乘莊嚴經論』のテキスト校訂についても、紙数の許される範囲で検討し、発表することにした。

## 一 弥勒（Maitreya）の五部論について

弥勒（Maitreya）が歴史上の人物なのか。信仰上の弥勒菩薩に仮託された、実際は無着（Asaṅga）、または無着以前の複数の師を指すのかについては、まだ決着がついていない。

字井伯寿博士は、かつて「弥勒は歴史上の人物である」<sup>⑤</sup>と主張され、それが一つの主流になってきたように思う。

字井博士はその後も『中辺分別論』の著者に関して「歴史的人物としての無著の師たる弥勒が無著菩薩に教えたもの、そして無著は此を世親に授けたから、世親は此に註釈を施した」<sup>⑥</sup>とあって、自説を主張されている。

これに対して山口博士は、オーバーミラー氏の所説を紹介し、

「龍樹が文殊菩薩の開頭によりて諸論を製作したと云う伝説と同じく、無著は兜率天上将来仏としての弥勒によりて開発せられて諸論を製作し



たとなすものであり<sup>⑦</sup>」

といって、『辯中辺論』の著者を無着としている。

更に『辯中辺論』の註釈者世親の帰敬偈を釈する安慧註をあげ、

「論偈の造者は聖弥勒なり、而して彼は一生補処の故に菩薩の神通と陀羅尼と無碍辯と三昧と根と忍と解脱とによりて妙彼岸に到り、菩薩の一切地に於ける障を残無く断じたり。ここに説者は軌範師無著なり。軌範師大徳世親は彼〔無著〕より聞きて此論の註を作りたり」<sup>⑧</sup>

といって、

「此論の著造者は将来仏の弥勒にして、説者は無著、註釈者は世親となす」<sup>⑨</sup>

といい、弥勒は将来仏としての弥勒であって、歴史上の人物とは認めていない。

このように弥勒（Maitreya）が歴史上の人物か否かについては諸説があり、まだ結論が出ていない。しかしながら、古くから弥勒の五部論といういい方で、弥勒著の作品があげられている。

ところで、チベット伝と中国伝（漢訳）とで内容に相違があり、漢訳の中でも一定しないようであるが、一般的には中国伝として、<sup>⑩</sup>

1. 瑜伽師地論
2. 分別瑜伽論（引用のみで現存せず）
3. 大乘莊嚴經論頌
4. 弁中辺論頌
5. 金剛般若論頌

などの五論<sup>⑪</sup>があげられている。

またチベット伝として、

1. Mahāyāna-sūtrālaṃkāra 大乘莊嚴經論頌

2. Madhyāntavibhāga 中辺分別論頌<sup>⑫</sup>
3. Dharmadharmatāvibhāga 法法性分別論頌<sup>⑬</sup>
4. Abhisamayālaṅkāra 現觀莊嚴論頌
5. Uttaratāntra 究竟一乘寶性論頌<sup>⑭</sup>

などの五論があげられている。

この中で、チベット伝と中国伝とで共通にあげられている論書は、

1. 大乘莊嚴經論頌 Mahāyāna-sūtrālaṅkāra
2. 弁中辺論頌 Madhyāntavibhāga

の二論のみである。それ故、この二論はチベット伝でも、中国伝でも弥勒造という伝承があり、重要な論書であるといえよう。

それではチベット伝において、「弥勒の五部論」ということは、いつ頃からいわれるようになったかというに、すでに袴谷憲昭氏が論じているように、チベット最古の訳経目録『デンカルマ』（824年成立）においては、

「アサンガ Asaṅga の地の五部（五部からなる『瑜伽師地論』を指す）と二種の綱要書（『摂大乘論』と『阿毘達磨集論』とを指す）、及びヴァスバンドゥ<sup>⑮</sup>

Vasubandhu の八論書のみを網格として諸典籍名を列举しようとした」といって、この当時には弥勒の五部論（マイトレーヤの五法）の記述は全く見あたらないとのことである。

そして十一世紀に至って、再びチベット仏教は盛んになるが、その頃、マイトレーヤ造とされる五論典中の三論典即ち『法法性分別論』『究竟一乘寶性論』『現觀莊嚴論』などが翻訳されたようである。<sup>⑯</sup>従って十一世紀以後に、チベットにおいて「マイトレーヤの五法」ということがいわれるようになったようである。

ところで、チベット伝において、マイトレーヤの五法の一つに数えられている『法法性分別論』であるが、私もかつて「唯識思想の成立について——

唯心から唯識へ——」（仏教学セミナー第49号 昭64年）で論じたように、

「『大乘莊嚴經論』の偈頌の部分は弥勒または無着といわれているが、この部分には vijñapti-mātra（唯識）は用いられていない。その顕著な例は『大乘莊嚴經論』の求法品第34偈と第35偈である。長行には、唯識（vijñapti-mātra）を求めるについての二偈といいながら、第34偈では『心は二として顕現する云々』、第35偈では『心は種々に顕現し、種々の行相を生起する』とあって、vijñapti ではなく citta となっているから、第35偈の直前の長行では唯心（citta-mātra）のみである<sup>⑰</sup>」

と説かれたのであろう。

従って『大乘莊嚴經論』の偈頌、すなわち、弥勒の所説の中には vijñapti-mātra はまだ説かれていないと思われるのに、『法法性分別論』では、世親の註釈の部分ばかりでなく、弥勒に帰せられる本文の中にも、vijñapti-mātra（唯識）に相当するチベット訳 rnam par rig pa tsam という語が三回も見出される。

すでに論じたことであるが、資料を正確に提示するため、ここに再検討する。

まず『法法性分別論』の世親の註釈の上では、

「正加行への悟入は四種である。すなわち、（一）得加行は唯識(vijñapti-mātra)を了得する故に。（二）不得加行は外境を了得しない故に。（三）得不得加行は外境なきときは唯識(vijñapti-mātra)も了得しない故に。表識の境なきときは、表識はありえないからである。（四）不得得加行は〔所取なる義と能取なる識との〕二は実には二性として有らざる不可得<sup>⑱</sup>によりて無二（平等）を得知するが故なり」

と説かれており、vijñapti-mātra という語が二回も用いられている。この個所は幸いにして、サンスクリット断片が存在するので、サンスクリットは

vijñapti-mātra であることが確認できる。

私が注目しているのは、弥勒に帰せられている『法法性分別論』の本文の上でも、Sk. vijñapti-mātra に相当するチベット訳 rnam par rig pa tsam が三回も説かれていることである。

「かくの如く得知するによりて唯識 (vijñapti-mātra) の得知に入る。唯識 (vijñapti-mātra) と得知するによりて、一切の境の不得知に悟入する。一切の境の不得知により唯識 (vijñapti-mātra) の不得知に悟入する」<sup>⑱</sup>

ここには明らかに『法法性分別論』の本文の上で、vijñapti-mātra (唯識) が説かれている。すなわち、弥勒の本文の上に vijñapti-mātra が説かれていることになる。

『大乘莊嚴經論』や『中辺分別論』の偈頌(弥勒造といわれる)の上で vijñapti-mātra が一度も使われていないのに、弥勒造といわれる『法法性分別論』には三回も vijñapti-mātra に相当するチベット訳 rnam par rig pa tsam が用いられていることに不自然さを感じる。

従って私は『法法性分別論』は弥勒の五部論から除くべきであろうと思っていたところ、袴谷憲昭氏も『法法性分別論』が弥勒造ということに疑問をもっていて、

「マイトレーヤ (Maitreya 弥勒) に帰される『法法性分別論』の方は、その著者に関する伝承から推測されるほどに古いものではなく、後に展開した術語を自明のごとく前提とした上で述作されており」<sup>⑲</sup>

といい、更に『法法性分別論』が後代の作品であることを断定して、

「五法のうち、紛れもなく後代に作られたと思われるものは、『法法性分別論』のみである」<sup>⑳</sup>

と述べている。

また勝呂博士も『初期唯識思想の研究』の中で、

「『法法性分別論』は『瑜伽論』『撰大乘論』より後の作成であろうと思う<sup>22)</sup>と述べておられるから、無着造の『撰大乘論』より後の作成であるということとは、勿論、『法法性分別論』は弥勒造ではなく、もっと後の作成ということであろう。

それでは vijñapti-mātra という語は、弥勒の論書の中に全く説かれていないかといえ、そうではない。この語が最初に用いられたのは、おそらく『解深密經』の分別瑜伽品（従って弥勒造といわれる『瑜伽論』撰決択分卷七十七と同じ）におけるものであろうといわれている。

「世尊よ、毘鉢舍那 (vipaśyanā) を行う三摩地 (samādhi) の行境は影像 (bimba, pratibimba) であります、それは何ですか。かの心と異であるか、異でないかといえ、慈氏よ、異ではないといわれる。何故に異ではないのかといえ、かの影像は唯識 (vijñapti-mātra) であるからである。慈氏よ、識の所縁は唯識 (vijñapti-mātra) によって顕わされる<sup>23)</sup>と私は説くのである」

ここには明らかに vijñapti-mātra (唯識) という語が用いられている。

しかし高崎直道博士も論じておられるように、ここには (一) 有分別影像、<sup>24)</sup> (二) 無分別影像、(三) 事の辺際、(四) 所作の成弁の四つの所縁<sup>25)</sup>が説かれているが、これに先行する『瑜伽師地論』の「声聞地」ではこの四種所縁は説かれているが、唯識 (vijñapti-mātra) は説かれていない。従って「声聞地」の所説の方が古いことは明らかであるが、これをすべて同一人物、弥勒 (Maitreya) に帰してよいかどうかの問題も残る。

このような背景のもとに、私は『法法性分別論』には vijñapti-mātra (唯識) が三回も出るのは不自然であり、従って私はこの論を弥勒の著とすることには、疑問があると論じたのである。<sup>26)</sup>

ところが最近『法法性分別論』は、もっと後世のもので、安慧 (Sthiramati)

以後の成立であると、松田和信氏が論じている。

「4、『法法性分別論』は初期唯識文献ではない。

最近では、袴谷憲昭、勝呂信静、舟橋尚哉等の諸氏の研究を通して、Dh. DhV（法法性分別論）の所説が、すでに完成した唯識思想を前提としているとの指摘が次々となされている。本稿での筆者〔松田和信〕の取上げた点からも、NPD（入無分別法門經）が Dh. DhV（法法性分別論）に先行する文献であることは確実であるように思われる。しかし NPD（入無分別法門經）は、スティラマティ以前の文献には遡り得ない<sup>27</sup>」

〔 〕は筆者（舟橋）が補った。

ここには私の名前まで出ていて、恐縮しているが、私は単に『法法性分別論』は、弥勒のものではないと論じただけであって、そんな後世の論書であると論じたわけではない。勝呂信静博士も、

「『法法性分別論』は『瑜伽論』『摂大乘論』より後代の作成であろうと<sup>28</sup>思う」

といっておられるだけである。

袴谷憲昭氏は「五法のうち、紛れもなく後代に作られたと思われるものは、『法法性分別論』のみである<sup>29</sup>」といっているから、かなり後代のものと考えているようである。

このように「弥勒の五部論」といっても、中国の伝承とチベットの伝承<sup>30</sup>とは「五部論」の内容が異なっているし、中国伝の中でも一定していないようである。

チベット伝の内、弥勒の五部論の一つである『究竟一乘宝性論』については、宇井博士は堅慧作ともいわれる<sup>31</sup>。

また弥勒の五部論を無着著とすることもいけないといわれる。

「最近の学者、例えばオーバーミラー博士等は、弥勒菩薩の五法は、凡

て事実無著の作であるが、後世弥勒菩薩の作と信ぜられるに至ったものである、となす如き考を有し、此考が他の人々の間にも比較的によく行われて居るように見える。（中略）

極端な説になると、無著が自ら論を著はし、それを権威あらしめる為に、当来仏たる弥勒菩薩に仮託したに外ならぬとまで論ずる人もある。（中略）

五法の中の究竟一乘宝性論を取って考えて見れば、これ等が凡て無著の著述であるなどとは到底断定せられ得るものではない<sup>32</sup>

このように宇井博士はあくまでも五部論は弥勒に帰せられる著であるが、中にはもっと後世のものも入っている。すなわち、この『究竟一乘宝性論』も後世のものの一つと考えておられるようである。

私も学部時代、『究竟一乘宝性論』のテキストを授業で講読していて、その後、興味のあるところを読んでいたが、第一章、三宝品の第一仏宝に、

「『不清浄な』は『幼童凡夫の煩惱障によって』であり、『不離垢な』は『声聞独覚の所知障によって』であり、『有汚点』は『菩薩の右の二の何れかとも異なるもの、即ち習気、によって』であり」（宇井訳496頁）<sup>33</sup>  
とある記述が、『大乘莊嚴經論』の安慧釈の「煩惱障と所知障との習気」と類似しているというより、更に一步発展させたものと思われるところから、何となく『究竟一乘宝性論』は弥勒の作ではない。もっと後期の作品ではないかと考えていたが、袴谷憲昭氏がいうように、

「前期に訳されることなく終った三論典、即ち『法法性分別論』『究竟一乘宝性論』『現觀莊嚴論』が翻訳されたこの後期伝播期に関係していたであろうとのおよその見当はつけることができる<sup>35</sup>」

ということであれば、『究竟一乘宝性論』も後世の成立の論書かもしれない。

このように弥勒の五部論を考察してきたが、弥勒の五部論というのは、昔

から定まっていて、確定しているのかと思っていたが、いろいろな角度から考察してみると、必ずしも一定していないし、ときには後世の作品まで弥勒（Maitreya）の著作とされて、権威づけられていることがわかる。

## 二 『大乘莊嚴經論』と『瑜伽師地論』

『大乘莊嚴經論』と『中辺分別論』は、チベット伝も中国伝も、ともに偈頌は弥勒ということになっていて、その上、思想的にも言葉遣いの上でも共通性があるように思われる。

ところが『瑜伽師地論』は、確かに中国伝では、弥勒の五部論の一つに数えられ、弥勒に帰せられているが、チベット伝では弥勒造には数えられていない。

かつて横山紘一氏は、「五思想よりみた弥勒の著作——特に『瑜伽論』の著者について——」において、虚妄分別の原語に関して、『中辺分別論』や『大乘莊嚴經論』では、abhūta-parikalpa が使われているのに、『瑜伽論』では vikalp<sup>36</sup>ya, vitatho vikalpāḥ, vikalpa などを使用され、abhūta-parikalpa は一度も使われていない。

また『法法性分別論』や『大乘阿毘達磨集論』『攝大乘論』なども、abhūta-parikalpa に相当するチベット訳 yañ dag pa ma yin paḥi kun [tu] rtog pa などが用いられている。これらのことから、横山紘一氏は、

「玄奘訳『瑜伽論』百巻中、虚妄分別という語は十個所に認められるが、その梵語、或は梵文の欠如する個所はチベット語訳を調べると、前表に示したように、abhūta-parikalpa 及びその類似語ではない。abhūta-parikalpa 及びその類似語に対する玄奘訳は常に虚妄分別で統一されていることを考え合せると、『瑜伽論』の梵本には、abhūta-parikalpa 及び



その類似語は、全く存在しないと断定出来るであろう。ところで『瑜伽論』の著者を『中辺分別論頌』の作者と同一人物であると考えれば、以上の事実は全く奇妙と言わざるを得ない。勿論、同一人物の著者間に同一語が見出されなくとも、必ずしも不思議ではないが、『瑜伽論』の如き膨大な分量を考えるならば、一度なりとも使用されてしかるべきであろう。しかるに、一語も認められ得ないという事実は、『瑜伽論』が弥勒の作ではない、或は、少なくとも、『中辺分別論』の作者と同一人物の作ではない、という一説への一論証となるのではあるまいか<sup>27)</sup>

と論じておられる。少し長く引用しすぎた感もなくもないが、『瑜伽論』の著者を考察する上には、大変重要な視点でもあるので、あえて引用した。

横山紘一氏が「『瑜伽論』が弥勒の作ではない。或は、少なくとも、『中辺分別論頌』の作者と同一人物の作ではない<sup>28)</sup>」という結論は、一応正しいように思われる。ただ同一人物でも初期と後期とでは、言葉遣いが変わる場合もあるので、100パーセント正しいとはいいい切れない。例えば『瑜伽論』の成立（この場合、菩薩地や声聞地の成立と考えた方がよい。なぜなら、当該の語〈vikalpya, vitatho vikalpaḥ, vikalpa〉は菩薩地に三ヶ所も出ているから）が『中辺分別論』や『大乘莊嚴經論』より若干成立が早くて、その時代にはまだ abhūta-parikalpa という語が使われていない場合だとすると、同一人物であっても可能性はあるが、最近のように、『瑜伽論』を編纂した中心人物は無着（Asaṅga）であるということになれば、無着は『中辺分別論』や『大乘莊嚴經論』や『攝大乘論』に関係しているから（向井氏は弥勒の实在人物説を否定するから、『中辺分別論』と『大乘莊嚴經論』との頌は無着造になると思う）、『瑜伽論』の中に abhūta-parikalpa（虚妄分別）という語が一度位用いられてもよいではないかという疑問が生ずる。つまり abhūta-parikalpa という語が、当時の唯識思想を表現するのにふさわしい語となっていたのなら、

『瑜伽論』でも、一度や二度は用いられてしかるべきかと思われる。

それでは『瑜伽論』で用いられる vikalpya<sup>⑩</sup>, vitatho vikalpaḥ<sup>⑪</sup>, vikalpa<sup>⑫</sup> などの語は、abhūta-parikalpa の語より、古い言葉といえるのかどうか。正確なことはまだわからないが、一応これらの言葉が『瑜伽論』の中でも比較的古い成立といわれている「菩薩地」(Bodhisattva-bhūmi) に三ヶ所も出ている。そうすると、これらの言葉は abhūta-parikalpa が用いられる以前からあった言葉といえるのではないだろうか。

『瑜伽論』自体、膨大なものであるから、同じ時期に一度に成立したとは考えにくい。ある部分は古く、ある部分は編纂の時に成立したかもしれない。

それに『中辺分別論』の相品第一偈に、「虚妄分別はあり」といって、abhūta-parikalpa (虚妄分別) という語が偈頌の中に用いられているから、偈頌と長行との年代差をどの位に見るかによっても異なるが、比較的古い言葉かもしれない。そうすると、『瑜伽論』の編纂の時に abhūta-parikalpa という語が成立していたのに用いなかったか、あるいは、この語がまだ成立していなかったかの疑問が残る。これらの問題は、弥勒に帰せられる論書の成立年代とも関連するので、今後の課題であろう。

「はじめに」の中で、「『大乘莊嚴經論』の構成は、『瑜伽論』菩薩地の名称と全く一致しているから、「菩薩地」を手本にして『大乘莊嚴經論』の各品の名称となったことは疑いない<sup>⑬</sup>」と述べたが、このことは宇井博士<sup>⑭</sup>や早島理氏<sup>⑮</sup>、それに最近、勝呂信静博士の大著の中でも、すでに指摘されているが、今ここに各品の名称だけあげると次頁の如くである。

これらによって『瑜伽論』菩薩地と『大乘莊嚴經論』との関係が明らかになってきたと思うが、『瑜伽論』は「声聞地」や「菩薩地」などの比較的古い部分と、「撰決撰分」(巻51—巻80)以下の部分とでは、若干の年代差があるようにもみえる。しかし勝呂博士の研究によれば、「声聞地に説くごとし」とか

『瑜伽論』菩薩地	『大乘莊嚴經論』	漢 訳
	1. 成立大乘品	〔1. 縁起品 2. 成宗品
	2. 帰依品	3. 帰依品
1. 種性品	3. 種性品	4. 種性品
2. 発心品	4. 発心品	5. 発心品
3. 自他利品	5. 行 品	6. 二利品
4. 真実義品	6. 真実品	7. 真実品
5. 威力品	7. 威力品	8. 神通品
6. 成熟品	8. 成熟品	9. 成熟品
7. 菩提品	9. 菩提品	10. 菩提品
8. 力種性品(1)勝解多	10. 勝解品	11. 明信品
9. (2)求 法	11. 求法品	12. 述求品
10. (3)説 法	12. 説法品	13. 弘法品
11. (4)修法行	13. 修行品	14. 随修品
12. (5)正教授	14. 教授教誡品	15. 教授品
(6)教 誡		
13. (7)方便撰三業	15. 方便業品	16. 業伴品
14. 六度(1)施品		
(2)戒品		
(3)忍品	16. 波羅蜜多品	17. 度摂品
(4)精進品		
(5)静慮品		
(6)業品		
撰事品		
15. 供養親近無量品	17. 供養親近無量品	〔18. 供養品 19. 親近品 20. 梵住品
16. 菩提分法	18. 菩提分品	21. 覺分品
17. 功德品	19. 功德品	22. 功德品
18. 持随法瑜伽処	20. ] 行建立品	〔23. 行住品
持究竟瑜伽処	21. ]	〔24. 敬仏品

「撰決択分に説くごとし」といって各部分が相互に引用し合っているとのことである。<sup>(47)</sup>

ということは『瑜伽論』百巻が完成した段階では、現在の『瑜伽論』に近いものであり、例えば本地分（巻1—巻50）だけが先に成立していて、撰決択分（巻51—巻80）以下が附加されたということとはありえないことになる。

そればかりか、「菩薩地」に相当する「菩薩地持経」にも「如撰事処説」（大正30, 904b）とか、「如声聞地」（大正30, 927a）とか説かれていることは「菩薩地」や「声聞地」だけが先に成立していたということも考えにくくなる。<sup>(48)</sup>

しかしながら勝呂信静博士も、

「本地分には『解深密経』の思想的影響が見られないのに対して、撰決択分にはそれが認められ、撰決択分の作成には『解深密経』が関与している<sup>(49)</sup>と見られる」

といわれ、『解深密経』の成立は本地分と撰決択分との中間であると推定されている。

『解深密経』は瑜伽唯識派の所依の經典といわれながら、漢訳（玄奘訳）でいえば、『瑜伽論』巻75（後半）、76、77、78と大部分が一致している。すなわち、『瑜伽論』では巻75の途中から、「如<sub>二</sub>解深密経中<sub>一</sub>」（大正30, 713c）とあって、『解深密経』の勝義諦相品をまるごと引用し、『瑜伽論』の巻76では、やはり「如<sub>二</sub>解深密経中<sub>一</sub>」（大正30, 718a）とあって、『解深密経』の心意識相品と一切法相品と無自性相品とに全く一致している。

また『瑜伽論』巻77でも、やはり「如<sub>二</sub>解深密経中<sub>一</sub>」（大正30, 723b）とあって、『解深密経』の分別瑜伽品と全く一致している。更に『瑜伽論』巻78でも、やはり「如<sub>二</sub>解深密経中<sub>一</sub>」（大正30, 729a）とあって、『解深密経』の地波羅蜜多品と一致し、また「分<sub>二</sub>別如来成所作事<sub>一</sub>」とあり、「如<sub>二</sub>解深密経中<sub>一</sub>」（大正30, 733c）とあって、『解深密経』の如来成所作事品と全く一致してい

る。

ただし『解深密經』の序品だけは、『瑜伽論』に全く出ていないから、おそらく『解深密經』として流布するときに、經典としての形を整えるために附加されたものであろう。

ここで問題になるのは、『瑜伽論』は本当に『解深密經』を引用したのか、すなわち、『解深密經』の方が先に成立していたのか、それとも『瑜伽論』を編纂する段階で『解深密經』は成立したのか、それとも『瑜伽論』から別出して『解深密經』が成立したのか、という問題である。

『解深密經』は玄奘訳であるから、『瑜伽論』（玄奘訳）と訳語まで一致しているが、『解深密經』以外に、菩提流支訳の『深密解脫經』がある。更に部分訳ではあるが、真谛訳の『解節經』や、また求那跋陀羅訳の『相續解脫地波羅蜜了義經』もある。

『解深密經』と『瑜伽論』とがこれだけ一致することは、同じ内容の文章が片方では經典とされ、片方では論書とされているので、大乘經典はどのようにして成立したのか、という問題を考える場合に、何か重要なヒントが隠されており、重要な資料になるかもしれない。これも今後の課題の一つであろう。

### 三 『大乘莊嚴經論』と『中辺分別論』

「弥勒の五部論」の中でも述べたように<sup>⑤⑥</sup>、『大乘莊嚴經論』（Mahāyāna-sūtrālaṅkāra）と『中辺分別論』（Madhyāntavibhāga）との二論は、チベット伝も、中国伝もともに「弥勒の五部論」の一つとして数えられており、初期唯識思想を伝えている重要な論書である。

『大乘莊嚴經論』は偈頌は弥勒または無着といわれ、長行は無着または世

親といわれていたが、最近では長行は世親が有力である。一方、『中辺分別論』は偈頌は弥勒または無着といわれ、長行は世親といわれている。

従来、長行の部分は『大乘莊嚴經論』は無着で、『中辺分別論』は世親といわれていたので、何となく『大乘莊嚴經論』の方が『中辺分別論』より成立が早いと思っていたが、『大乘莊嚴經論』覚分品には「『中辺分別論』に説かれる如し<sup>51)</sup>」とあることにより、『大乘莊嚴經論』に『中辺分別論』が引用されているのであるから、常識的には『中辺分別論』の方が先に成立していたことになる。はたしてそれでよいのかどうか。

ところで『大乘莊嚴經論』に「『中辺分別論』に説かれる如し」の引用があることを指摘し、最初に論じられたのは宇井伯寿博士だと思う。すなわち、宇井博士は、

「莊嚴經論の第16の43、シナ訳第17の36の釈に、四念処の十四種の勝修の第三、入諦勝修を解釈して、

入諦勝修とは、謂く、其次第の如く、次第に苦集滅道の諦に入るが故なり。

自ら入り他の入ること、中辺分別論に説くが如し。

とあるが、これは中辺論対治修住品第4の第1偈に、四念処について、  
庵重と愛の因との故に、我事と不愚扶との故に、

四聖諦に入る為に、四念処の修習がある。

<sup>52)</sup>  
といい」

といわれ、ここの「中辺分別論に説くが如し」の個所は、玄奘訳「辯中辺論」では、

「以庵重愛因 我事無迷故

為入四聖諦 修念住應知<sup>53)</sup>」(大正31, 471b)

に相当するが、サンスクリット原本では、

dauṣṭhulyāt tarṣa-hetutvād vastutvād avimohataḥ<sup>54)</sup>

catuḥ-satyāvatārāya smṛty-upasthāna-bhāvanā IV 1

となっている。

ここは三十七道品中の四念処（四念住）を説く個所であるから、これによって『大乘莊嚴經論』の長行の部分は、『中辺分別論』の偈頌より後の成立であることは明らかであるが、『中辺分別論』の長行よりも後の成立といえるのかどうか、問題となるところである。このことに関して、宇井博士は、

「莊嚴經論の釈は、中辺論頌よりも後の作なることは明かであるが、恐らく中辺論の釈よりも後の作というべきものであろう」<sup>55)</sup>

といっておられるが、『大乘莊嚴經論』も『中辺分別論』も長行の部分は世親（Vasubandhu）の作ということになれば、ほぼ同じ頃に成立したと考えてもよいだろう。

ただ『大乘莊嚴經論』にしても、『中辺分別論』にしても、長行の部分は同じ頃に成立したとしても、それぞれの偈頌の部分が先行して成立していたかどうかは問題となる。

まず初めに『大乘莊嚴經論』の場合でいえば、私は偈頌の成立と長行の成立との間には若干の年代差があると考えている。その理由は、

1. 偈頌は弥勒または無着に帰せられているが、長行は世親菩薩造となっている。
2. 偈頌には vijñapti-mātra（唯識）は出ず、唯名（nāma-mātra）となっていたり（求法品第48偈）、citta-mātra（唯心）を意味する「心が二の顯現をなす」（求法品第34偈）となっているが、長行では vijñapti-mātra が用いられている。（求法品第47偈の長行、第48偈の長行）
3. 偈頌には阿頼耶識（ālaya-vijñāna）という語が見あたらないが、長行では「阿頼耶識の転依」（求法品第44偈の長行）が説かれている。

また『中辺分別論』でも、偈頌には vijñapti-mātra（唯識）も阿頼耶識（ālaya-vijñāna）も、勿論、出ていないが、長行の部分では相品第六偈の長行に、vijñapti-mātra（唯識）は二回も出ているし、また無上乘品第二十六偈の長行には、vijñapti-mātra-jñāna という語が二回も出ている。

ālaya-vijñāna も相品第九偈の長行に一回と、真実品第二十三偈の長行に一回出ている。

従って『大乘莊嚴經論』の場合、偈頌の成立と長行の成立との間では、若干の年代差があるように思うが、宇井博士はこの間の年代差をあまり考えずに、偈頌の造者と長行を釈する人との間には、極めて親近の関係にあるか、または口伝、指示があったにちがいないといわれる。その理由は『大乘莊嚴經論』第一章成立大乘品の第十六偈において、

śrutaṃ niśrityādaṃ prabhavati manaskāra iha yo <sup>56</sup>

「聞に依止して、初めにここに如理作意が生じ」<sup>57</sup>

と説かれているが、この yo を見て、「頌に yo とあるのは yoniśas（如理に）<sup>58</sup> という意」と註釈ができるのは、

「かかる解釈は此釈全体が頌作者と極めて親近の関係にあるを示すものであろう。口伝、指示などがなくば、yo が yoniśas だなどとどうしていえるか」<sup>59</sup>

といって、宇井博士は偈頌の作者と長行を釈する人との親近性を主張されている。確かに yo と偈頌にあるのを見て、代名詞の yo ではなく、yoniśas と解釈するのだから、やはりそこには口伝や指示があったのであろう。この場合、無着と世親は兄弟であるから、偈頌の作者が無着で、長行を釈する人が世親であれば問題はないが、偈頌を弥勒として、長行を釈する人が世親であれば、偈頌と長行との間に、若干の年代差を考えなくてはならないであろう。

ところで十自在ということが、『十地經』（従って華嚴經「十地品」）に説か



れているが、華嚴經「世間品」にも説かれている。<sup>60</sup> また『攝大乘論』<sup>61</sup> や『大乘阿毘達磨集論』<sup>62</sup> にも説かれている。<sup>63</sup> 『顯揚聖教論』第八には次の如く説かれている。

「十種自在名為<sub>二</sub>功用<sub>一</sub>何者為<sub>レ</sub>十。一寿自在。二心自在。三衆具自在。四業自在。五生自在。六願自在。七勝解自在。八神變自在。九智自在。十法自在」（大正31, 517b）

その他、十自在は『究竟一乘宝性論』やハリバドラの Abhisamayālaṃkāra-lokā Prajñāpāramitā-vyākhyā などにも説かれているが、一 一の説明はない。

ところが『大乘莊嚴經論』と『中辺分別論』では、十自在ではなく、四自在<sup>64</sup> が説かれている。『大乘莊嚴經論』求法品第四十五偈、第四十六偈では、

「意と執受と分別とが転ずる故に、実に、無分別と国土と智慧と業とにおいて、自在は四種である」（第四十五偈）

「そして不動等の三地において、かの四種の自在がある。一方の〔不動地〕には二種がある。それより他（善慧地と法雲地）には一つ一つの自在<sup>65</sup> が考えられている」

と説かれ、その長行では、

「そして不動等の三地において、ここでいう、かの四種の自在が知らるべきである。一方の〔第八〕不動地には二種がある。（1）無分別〔自在〕において、無行・無分別の故に、（2）また国土〔自在〕において仏国土を清浄にする故に。その他の地においては一つ一つの自在がある。〔第九〕善慧〔地〕において智慧自在がある。殊勝な無礙解が得られる故に、〔第十〕法雲〔地〕において、業における〔自在〕がある。神通の諸業の無障礙<sup>66</sup> の故に」

と説明されている。

また『中辺分別論』障品では、第八地、第九地、第十地に関連して次の如く「四自在」が説かれている。

「四自在とは、（１）無分別自在と、（２）浄土自在と、（３）智自在と、（４）業自在とである。その中、第八地によって法界における初めの〔自在〕（無分別自在）と第二の自在（浄土自在）の所依止を通達する。第九地において智自在の所依止を〔通達する〕。無礙解を得る故に。第十地においては業自在の所依止を〔通達する〕。思うがままに変化して有情の利益を為す故に」と。<sup>67</sup>

十自在は諸經論にしばしば説かれているが、四自在はあまり説かれていないと思う。しかも四自在に関する『大乘莊嚴經論』と『中辺分別論』の所説は全く一致している。すなわち、第八不動地には二種あり、（１）無分別自在と（２）国土清浄の浄土自在とである。第九地は（３）智〔慧〕自在であり、第十地は（４）業自在である。

ここで『中辺分別論』だけでは、「思うがままに変化して有情の利益を為す故に」という記述はあるが、何故、業自在が四自在において、最後の第十地で説かれるのかわかりにくい。しかし『大乘莊嚴經論』第四十三偈の長行を見ると、業の殊勝は変化〔身〕と関連して次の如く説かれているので、この疑問に解答が与えられるように思われる。

「殊勝は五種の殊勝によってである。①清浄の殊勝にあってとは、習気と共なる煩惱が清浄の故に、②遍く清浄の殊勝によってとは、国土の遍く清浄の故に、③身の殊勝によってとは法身によって、④受用〔身〕の殊勝によってとは衆会（parśanmaṇḍala）において断絶のない法の受用が行なわれる故に、⑤業の殊勝によってとは、兜率天宮に住する等の変化〔身〕によって衆生利益の事業を行なう故に」<sup>68</sup>

ここに業の殊勝が三身すなわち、法身、受用身、変化身の中の変化身と関

連して説かれていることは注目に値する。

いま『大乘莊嚴經論』の四自在が説かれる求法品第四十六偈を見るに、先に述べた如く、<sup>(69)</sup>「意と執受と分別とが転ずる故に」とあるが、これはいうまでもなく、有名な求法品第四十偈の三種三種の顯現の<sup>(70)</sup>「意と執受と分別としての顯現」と関連している。

これら「意と執受と分別との転依」が（１）無分別自在と、（２）国土自在と、（３）智慧自在及び（４）業自在に相当する。そしてこれらの自在が十地と関連して、無分別自在と国土自在は第八地に、智慧自在は第九地に、業自在は第十地に説かれている。<sup>(71)</sup>

先の論文では、<sup>(72)</sup>『中辺分別論』の所説だけではわかりにくい、『大乘莊嚴經論』の所説を見ると、第十地業自在の記述に納得がいくから、『中辺分別論』の所説は『大乘莊嚴經論』の所説を前提としているのではないかと論じたが、これは必ずしもそうとはいえず、逆に『大乘莊嚴經論』の方が『中辺分別論』より成立が後だから、長行で詳しく論じられたのかもしれないので、この点についてはまた別の機会に論ずることにする。いずれにしても、『大乘莊嚴經論』と『中辺分別論』とは思想的には類似点も多いので、著者も同一人物である可能性が強いと思われる。

#### 四 『大乘莊嚴經論』とその他の初期唯識論書

『大乘莊嚴經論』と『中辺分別論』とは、思想的にも共通性があり、偈頌は弥勒または無着であり、長行の部分は世親であるといわれる。（『大乘莊嚴經論』の長行の部分は無着または世親ともいわれるが、最近では世親説が有力である。）

ところで『大乘莊嚴經論』と密接な関係をもつ、初期唯識論書といえば、

『撰大乘論』であろう。すなわち『撰大乘論』には『莊嚴經論』の頌が、十三個所、四十頌ほどが引用されている。<sup>73</sup>

この引用頌については、勝呂博士が詳細に検討されているので、今は——論じないが、その中で勝呂博士は、

「もし『莊嚴經論』が無着の自著であれば、その文脈は原則的に両書において類似あるいは一致していなければならないはずである。文章作成の心理から考えてみても、同一の著者が同一の頌句を異なった文脈において用いるということは甚だありえないことのように思われる。同一の作者であれば、頌句の形成する文脈はおのずから類似したものとなるであろう。これに対し、その文脈が異なっているならば、作者は別人と見られる可能性が強いのであって、無着は『莊嚴經論』の頌を利用した<sup>74</sup>のであるが、それは自著ではないということになるであろう」

といわれる。そして、個々の偈頌を検討され、『大乘莊嚴經論』求法品第二十四偈の「迷乱の因と迷乱云々」と『撰大乘論』所知相分の偈頌並びに註釈を検討して、

「『莊嚴經論』と『撰大乘論』において、この頌の意味は全く同じであるとはいいがたい。『撰大乘論』は自説に合致するように『莊嚴經論』の文意を多少改めてこの頌を引用している<sup>75</sup>のであろう」

といわれる。

また『莊嚴經論』信解品第十一偈の「無量の人である衆生は云々」と『撰大乘論』入所知相分の場合も、

「『撰大乘論』は『莊嚴經論』とは異なった文脈においてこの頌を用いていることは確かであろう。この点においてやはり当頌を利用した<sup>76</sup>ものであると判断して差支えないと思う」

といわれる。また『莊嚴經論』功德品第五十偈の「現前に立てられた相と云々」

と『撰大乘論』入所知相分の場合でも、

「両書の釈の表現はかなり異なっている。これはそれぞれの釈は本文の文脈にしたがって釈しているのであって、註釈者独自の立場で註釈した<sup>⑦⑦</sup>ものではないことを示すものであろう」

といわれる。その他、『大乘莊嚴經論』の功德品第四十七偈の場合も、

「しかし細かく見ると、両書には力点の置き方の相違が認められる<sup>⑦⑧</sup>」

といわれる。

次に『大乘莊嚴經論』真實品第六偈～第十偈の五偈が『撰大乘論』に引用されている場合は、『大乘莊嚴經論』の名を出して引用している有名な個所である。勝呂博士は、

「両書の註釈を見ると趣意は異ならないにしても、『撰大乘論』の方が『莊嚴經論』よりもかなり詳細である<sup>⑦⑨</sup>」

といわれるように、『莊嚴經論』の趣意にそって『撰大乘論』の註釈は更に詳しく論ぜられたと思われる。

『大乘莊嚴經論』真實品の第六偈～第十偈の引用は別として、『撰大乘論』の解釈と『大乘莊嚴經論』の解釈とは、必ずしも合致していない。ということとは、無着（Asaṅga）が両書とも作ったということは疑わしくなってくる。『撰大乘論』は無着の作ということは一般に認められているので、そうすると、『大乘莊嚴經論』の偈頌と長行の作者は誰かという問題が起こってくる。

特に偈頌について、無着（Asaṅga）作とすると、自分で造った偈頌を『撰大乘論』に引用して、『大乘莊嚴經論』の解釈と趣意の異なる解釈をするであろうか。また何故、『莊嚴經論』『真實品』の引用だけ『大乘莊嚴經論』よりの引用と明記するのであろうか。

このように考えてくると、『大乘莊嚴經論』の造論者と『撰大乘論』の造論者とは、同じ Asaṅga（無着）であることに疑問を生じてくる。これはあま

りにも大きな問題であるので、今後の課題としておく。

それ以上に疑問なのは、『大乘莊嚴經論』と『中辺分別論』は同じ傾向の論書であると思われるので、同一人物がかかわっていると思われるが、『瑜伽論』はどう見ても、少し傾向を異にしている、同じ著者とは考えにくい。

『瑜伽論』の方が成立がやや早く、用語や思想も異なるところがあるのに、これを同一人物の時代的な差、たとえば初期の作品と中期または後期の作品とに理解してよいかどうかの問題である。これも今後の課題としておこう。

『大乘莊嚴經論』には見あたらないが、『瑜伽論』には十因が説かれている。すなわち『瑜伽論』には巻五の本地分中、有尋有伺等の三地之一を説く個所と、菩薩地(巻三十八)と、それに最後の摂事分巻百との三個所において、十因が説かれている。

瑜伽論巻五の本地分中、有尋有伺の三地之一を説くところでは、まず「因と縁と果との依処(adhiṣṭhāna)は何か」と問い、「語(vāc)、領受(anubhava)、習気(vāsanā)等の十五種の依処をあげている。次に「因と縁と果との差別は何か」と問い、「十因と因縁と五果とである」といって、十因(daśa-hetu)を説いている。すなわち、「随説因、観待因、牽引因、生起因、摂受因、引発因、定異因、同事因、相違因、不相違因」である。そしてこれらは先の「十五種の依処」に関連して説かれている。例えば、「語の依処によって随説因が施設される」とか、「領受因の依処に依って観待因が施設される」と説かれている。<sup>80</sup>

一方、『中辺分別論』では十能作(daśa-kāraṇa)が説かれている。すなわち、「生起能作、安住能作、任持能作、照了能作、変壊能作、分離能作、転変能作、信解能作、顯了能作、至得能作」である。

『大乘阿毘達磨集論』は、この『瑜伽論』の「十因」と『中辺分別論』の「十能作」とを合して、二十能作を説いたものと思われる。<sup>81</sup> 順序は『中辺分

別論』の十能作を「1～10」に当て、『瑜伽論』の十因を「11～20」に当てている。従って、『阿毘達磨集論』は『瑜伽論』より成立が後であることは当然であるが、『中辺分別論』よりも成立が後であると思う。なぜなら、『中辺分別論』では十能作は善等の十に関連して説かれているから、必然性があり、オリジナルと考えられるが、『阿毘達磨集論』では、単に『瑜伽論』の十因と『中辺分別論』の十能作を合して二十能作（kāraṇa）を説いたように思われるからである。

もし『阿毘達磨集論』が無着の作であるならば、『中辺分別論』の世親釈より後の成立の可能性が強い。（十能作と二十能作の関係から）。そうになると、『阿毘達磨集論』は無着の初期の作品ではないかといわれてきたが、この点がどうもあやしくなってくる。のみならず、十二有支と三雑染の関係から、<sup>82</sup>『阿毘達磨集論』は『摂大乘論』よりも後の作品の可能性が強い。『摂大乘論』は無着の晩年に完成された作品であるといわれているので、そうになると、『阿毘達磨集論』は、それより後の無着の作品なのか。あるいは無着以後の人が無着造として作った作品ではないかとも考えられる。いずれにしても、重大な問題なので、ここですぐに結論が出るわけではないが、無着が初期唯識論書をすべて造ったとは考えにくいのではないだろうか。今後の大きな課題の一つであると思う。

最後に論書ではないが、『入楞伽經』も初期唯識論書と深くかかわっており、初期唯識思想の成立を考察する上に重要な資料であると思う。

『入楞伽經』の中、四卷楞伽といわれる『楞伽阿跋多羅宝經』は、求那跋陀羅が劉宋の元嘉二十年すなわち443年に訳出であるから、およそ350-400年頃<sup>83</sup>の成立と考えられる。<sup>84</sup>

『入楞伽經』には「五法、三性、八識、二無我」が説かれて（四卷楞伽にも説かれて<sup>85</sup>）おり、特に八識が説かれているところから、世親以後の論書と

いわれていたが、世親の「釈軌論」の記述などから、世親は『入楞伽經』を知っていた、すなわちほぼ同時代の人と考えられる。

『瑜伽論』特に声聞地や菩薩地は、それ以前の成立であろうから、300年—350年頃の成立ではなかろうか。

なお、私は『中辺分別論』と『大乘莊嚴經論』との偈頌と長行との年代差を約50年位と考えているが、これらの点については、また別の機会に論じたいと思う。

## ま と め

『大乘莊嚴經論』については、多くの学者の研究があり、私自身も「<sup>ネー</sup>ル  
写本対照による大乘莊嚴經論の研究」（国書刊行会 昭和60年）を発刊している。しかしながら、偈頌と長行を作った人は誰か、同一人物か否か、についてもまだ確定していない。

私は「弥勒の五部論」を中心に、最近、弥勒の五部論の中で、後世の作品ではないかと疑われている論書について検討しながら、弥勒の五部論の意義を考察した。中でも『大乘莊嚴經論』と『中辺分別論』は、中国伝にもチベット伝にも「弥勒の五部論」として数えられており、しかもいずれも梵蔵漢の三本が揃っているので重要な論書であると思う。

今回、『大乘莊嚴經論』を『瑜伽論』や『中辺分別論』、更には『撰大乘論』を初めとする初期唯識論書と比較検討することにより、『大乘莊嚴經論』と『中辺分別論』との先後問題や『大乘阿毘達磨集論』との先後問題を少しでも明らかにできればと思った次第である。論書ではないが、『入楞伽經』の唯識思想との関連も重要であると思う。

この經の四卷楞伽は443年に訳出されたことが明らかであるので、唯識論書



の成立年代を決める上に重要な資料となるのではないかと思う。今回は時間切れとなったので、一応のまとめとしたが、もう一度改めてこれらの問題を整理して検討してみようと思う。

最後に『大乘莊嚴經論』のテキスト校訂であるが、すでに先の本を出版した後、第十一章、第十二章だけは校訂テキストを作っていたので、それに少し手を加えて、ここに第十一章のみを載せることにした。

写本については、私のいうNs本からNc本へ、Nc本からA本へ、NB本からNA本へ、Ns本からB本へ転写された<sup>⑧6</sup>ことが認められれば、Ns本とNc本それに大谷探検本のA本、B本だけでもよいが、今はなるべく多くの写本を示した方がよいかと思い、できるだけの資料を提示した。勿論、私のいうネパール写本の転写が一般に認められれば、今後は重要と思われる写本のみの表示にしたいと思っている。

## 注

- ① 『中辺分別論』の梵文題目については、山口益博士のチベット訳よりの還元梵語 Madhyāntavibhāga[*tikā*] や、山田竜城博士の Madhyāntavibhaṅga（梵語佛典の諸文献125頁）などがあったが、ラーフラ、サンクリトヤーヤナのチベットのシャル寺での梵本テキスト発見により、またそのテキスト出版（Nagao: Madhyāntavibhāga-[*bhāṣya*] 1964 や Tatia: Madhyānta-vibhāga-[*bhāṣya*] 1967）により、Madhyāntavibhāga に確定した。
- ② 早島理氏「菩薩道の哲学」—「大乘莊嚴經論」を中心として—（南都仏教第30号所収）昭和48年 3頁参照。
- ③ 宇井博士「莊嚴經論並びに中辺論の著者問題」（名古屋大学文学部研究論集 XV 1956）33頁参照。
- ④ 宇井博士『大乘莊嚴經論研究』439頁参照。
- ⑤ 宇井博士「印度哲学研究」第一巻 377頁参照。「弥勒の本文と世親及安慧の釈とのみが伝わって居る故に頌と釈との作者については、何等の異説もない訳で、頌は確に弥勒造である」

- ⑥ 『国訳一切経』瑜伽部十三「辯中辺論解題」（昭和8年）  
山口益博士「中辺分別論釈疏」序論29頁参照。
- ⑦ 山口博士「中辺分別論釈疏」序論29頁参照。
- ⑧ 同 書 序論30頁参照。
- ⑨ 同 書 序論30頁参照。
- ⑩ 山田竜城博士「梵語仏典の諸文献」125頁参照。
- ⑪ 同 書 125頁参照。
- ⑫ 山田竜城博士「梵語仏典の諸文献」125頁では Madhyāntavibhaṅga とあるが、  
現在サンスクリット写本が見つかり、出版されているが、いずれも（Nagao 本も、  
Tatia 本も）Madhyāntavibhāgabhāṣya となっている。
- ⑬ ここのチベット訳 rnam par ḥbyed pa は、中辺分別論の vibhāga に相当する  
チベット訳と一致している。
- ⑭ 拙著「初期唯識思想の研究」（昭和51年）60頁参照。
- ⑮ 袴谷憲昭氏「チベットにおける唯識思想研究の問題」（『東洋学術研究』第21巻第  
2号）昭和57年 145頁参照。
- ⑯ 同 上 151頁参照。
- ⑰ 拙稿「唯識思想の成立について—唯心から唯識へ—」（仏教学セミナー第49号）10  
-11頁（抄説）参照。
- ⑱ 同 上 13頁参照。  
山口博士「弥勒造『法法性分別論管見』（常盤博士還暦記念 仏教論叢）55頁参  
照。  
チベット訳34頁18行目（『山口博士還暦記念 印度学仏教学論叢』所収）
- ⑲ 拙稿「唯識思想の成立について—唯心から唯識へ—」（仏教学セミナー第49号）13  
頁参照。  
チベット訳17頁7行目（『山口博士還暦記念 印度学仏教学論叢』所収）
- ⑳ 袴谷憲昭氏「唯識文献における無分別智」（『駒沢大学仏教学部研究紀要』第43号  
昭和60年）224頁参照。
- ㉑ 袴谷憲昭氏「チベットにおけるマイトレーヤの五法の軌跡」（山口瑞鳳編『チベッ  
トの仏教と社会』昭和61年 258頁参照。
- ㉒ 勝呂博士『初期唯識思想の研究』186頁参照。
- ㉓ 『西藏大藏經』影印北京版29巻13-5-7 参照。

高崎直道博士「瑜伽行派の形成」（講座 大乘仏教 8）（取意）12頁参照。

拙稿「唯識思想の成立について—唯心から唯識へ—」（仏教学セミナー第49号）4頁参照。

- ②④ 高崎直道博士「瑜伽行派の形成」（講座 大乘仏教 8）18頁参照。

拙稿「唯識思想の成立について—唯心から唯識へ—」（仏教学セミナー第49号）5頁参照。

- ②⑤ 高崎直道博士「瑜伽行派の形成」18頁参照。

拙稿「唯識思想の成立について—唯心から唯識へ—」（仏教学セミナー第49号）5頁参照。

- ②⑥ 拙稿「唯識思想の成立について—唯心から唯識へ—」（仏教学セミナー第49号）6頁参照。

- ②⑦ 松田和信氏「Nirvikalpapraveśa 再考—特に『法法性分別論』との関係について—」（印度学仏教学研究第45巻第1号）365頁参照。

- ②⑧ 註②参照。

- ②⑨ 註②参照。

- ③⑩ 註⑩参照。

- ③⑪ 山田竜城著「梵語仏典の諸文献」125頁参照。

宇井博士『宝性論研究』89頁参照。

- ③⑫ 宇井博士「莊嚴經論並びに中辺論の著者問題」（名古屋大学文学部研究論集 XV）28頁参照。

- ③⑬ 宇井博士「宝性論研究」（昭和34年）496頁参照。

- ③⑭ 『大乘莊嚴經論』菩提品安慧釈、影印北京版108巻248-3-8。「仏位以後は十〔地〕に属する煩惱障と所知障との習気を残りなく断ずるから」（「仏教思想研究」第一号、5頁参照）。

拙稿「煩惱障所知障と人法二無我」（仏教学セミナー第1号）58頁、59頁参照。

- ③⑮ 袴谷憲昭氏「チベットにおける唯識思想研究の問題」（「東洋学術研究」第21巻第2号）151頁参照。

- ③⑯ 横山紘一氏「五思想よりみた弥勒の著作—特に『瑜伽論』の著者について—」（宗教研究第45巻第1輯 208号 1971年）31頁参照。

- ③⑰ 同論文 33頁参照。

- ③⑱ 同論文 33頁参照。

- ③⑨ 向井亮氏「アサンガにおける大乘思想の形成と空観」（『宗教研究』第49巻第4輯、227号）1976年、参照。
- ④⑩ U. Wogihara : Bodhisattvabhūmi I. p. 46, l. 11
- ④⑪ U. Wogihara : Bodhisattvabhūmi I. p. 52, l. 13-l. 14
- ④⑫ U. Wogihara : Bodhisattvabhūmi I. p. 135, l. 5
- ④⑬ 本論文3頁参照。
- ④⑭ 宇井博士「瑜伽論研究」44頁参照。
- ④⑮ 早島理氏「菩薩道の哲学—『大乘莊嚴經論』を中心として—」（南都仏教第30号）3頁参照。
- ④⑯ 勝呂信静博士『初期唯識思想の研究』332頁参照。
- ④⑰ 同 書 249頁参照。
- ④⑱ 同 書 250-291頁参照。
- ④⑲ 同 書 268頁参照。
- ⑤⑰ 本論文6頁参照。
- ⑤⑱ S. Lévi : Mahāyānasūtrāṅkāra Tome 1. p. 140-p. 141.  
yathoktaṁ madhyāntavibhāge
- ⑤⑲ 宇井博士「莊嚴經論並びに中辺論の著者問題」（名古屋大学文学部研究論集 XV、1956）23頁参照。
- ⑤⑳ 大正31、471 b、山口博士「漢藏対照弁中辺論」70頁参照。
- ⑤㉑ Nagao : Madhyāntavibhāga-bhāṣya p. 50, l. 6
- ⑤㉒ 宇井博士「莊嚴經論並びに中辺論の著者問題」23頁参照。
- ⑤㉓ S. Lévi : Mahāyānasūtrāṅkāra Tome 1. p. 7, l. 3
- ⑤㉔ 宇井博士「大乘莊嚴經論研究」56頁参照。
- ⑤㉕ 同 書 56頁参照。
- ⑤㉖ 同 書 589頁参照。
- ⑥⑰ 十自在の所説について詳しくは拙稿「四自在と十自在—初期唯識論書を中心として—」（印度学仏教学研究第26巻第1号）参照。
- ⑥⑱ 『撰大乘論』第十一彼果智分（玄奘訳）大正31、149中参照。
- ⑥㉑ 『大乘阿毘達磨集論』卷四（大正31、681中）参照。
- ⑥㉒ 『顯揚聖教論』卷八（大正31、517中）参照。
- ⑥㉓ 拙稿「四自在と十自在—初期唯識論書を中心として—」（印度学仏教学研究第26巻

第1号）365頁参照。

⑥5 同 書 365頁参照。（Lévi 本、p. 66, *l.* 8-*l.* 12）

⑥6 同 書 365頁参照。（Lévi 本、p. 66, *l.* 14）

⑥7 Nagao: *Madhyāntavibhāga-bhāṣya* p. 36, *l.* 1 参照。

山口博士「中辺分別論釈疏」156頁—157頁参照。

拙稿「四自在と十自在—初期唯識論書を中心として—」（印度学仏教学研究第26巻第1号）365頁参照。

⑥8 S. Lévi 本、p. 65, *l.* 24参照。

拙稿「四自在と十自在—初期唯識論書を中心として—」（印度学仏教学研究第26巻第1号）367頁参照。

⑥9 本論文21頁参照。

⑦0 高崎直道博士「入楞伽經の唯識説—Deha-bhoga-pratiṣṭhābham Vijñānam の用例をめぐって—」（「仏教学」創刊号）14頁参照。

⑦1 拙稿「四自在と十自在—初期唯識論書を中心として—」368頁参照。

⑦2 拙稿「四自在と十自在—初期唯識論書を中心として—」（印度学仏教学研究第26巻第1号昭和52年）参照。

⑦3 勝呂博士「初期唯識思想の研究」398頁参照。

⑦4 同 書 399頁参照。

⑦5 同 書 405頁参照。

⑦6 同 書 414頁参照。

⑦7 同 書 419頁参照。

⑦8 同 書 420頁参照。

⑦9 同 書 427頁参照。

⑧0 拙稿「十能作と二十能作—初期唯識論書を中心として—」（印度学仏教学研究第28巻第1号）昭和54年、328頁参照。

⑧1 同 右 331頁参照。

⑧2 拙稿「『大乘阿毘達磨集論』と初期唯識論書との先後について—十二有支と三雑染との関係を中心として—」（仏教学セミナー第54号）昭和60年参照。

⑧3 「国訳一切経」經集部七 解題63頁参照。

⑧4 「世親と楞伽經との前後論について」（印度学仏教学研究第20巻第1号）324頁参照。

34 『大乘莊嚴經論』の諸問題並びに第11章求法品のテキスト校訂（舟橋）

⑧⑤ 「四卷楞伽」卷四、22a（偈頌）、21a 参照。

⑧⑥ 拙著「ネパール写本対照による 大乘莊嚴經論の研究」38頁参照。

⑧⑦ 岩本明美氏「『大乘莊嚴經論』第十三章「修行章」—サンスクリットテキストと和訳—」（インドチベット学研究、第3号）57頁参照。

（平成11年10月2日脱稿）

# MAHĀYĀNASŪTRĀLAṂKĀRA

## XI (dharma-paryeṣṭy-adhikāraḥ)

(Ns 44a)

L.53

[Nc 37a] dharma-paryeṣṭy-adhikāre ālambana-paryeṣṭau catvāraḥ Ba.55  
ślokaḥ |

**piṭaka-trayaṃ dvayaṃ vā saṃgrahataḥ kāraṇair navabhir  
iṣṭaṃ |**

**vāsana-bodhana-śamana-prativedhais tad vimocayati || XI. 1**

(Ns 44b) piṭaka-trayaṃ sūtra-vinayābhidharmāḥ|

tad eva trayaṃ hinayānāgrayāna-bhedena dvayaṃ bhavati | śrāvaka-  
piṭakaṃ bodhisatva-piṭakaṃ ca | tat punas trayaṃ dvayaṃ vā kenār-  
thena piṭakam ity āha | saṃgrahataḥ sarvajñeyārtha-saṃgrahād  
veditavyaṃ | kena kāraṇena trayaṃ | navabhiḥ kāraṇair vicikitsā-  
pratipakṣeṇa sūtraṃ yo yatrārthe saṃśayitas tasya tan-niścayārthaṃ  
deśanāt | anta-dvayānuyoga-pratipakṣeṇa vinayaḥ sāvadya-paribhoga-  
pratiṣedhataḥ kāma-sukhallikānuyogāntasyānavadya-paribhogānujñānata  
ātma-klamathānuyogāntasya | svayaṃ dṛṣṭi-parāmarṣa-pratipakṣeṇābhi-  
dharmo 'viparīta-dharma-lakṣaṇābhidyotanāt |

punaḥ śikṣā-traya-deśanā sūtreṇa adhiśilādhicitta-saṃpādanatā L.54  
vinayena śilavato 'vipratīṣārādi-kramaṇa<sup>1)</sup> samādhilābhāt | adhiprajñā-  
saṃpādanābhidharmenāvīparītārtha-pravicayāt | punar dharmārtha-  
deśanā sūtreṇa | dharmārtha-niṣpattir vinayena kleśa-vinaya-saṃyukta-  
sya tayoḥ prativedhāt | dharmārtha-saṃkathya[Nc 37b]-viniścaya-kausā-  
lyam abhidharmeṇēti |

ebhiḥ navabhiḥ kāraṇaiḥ piṭaka-trayaṃ iṣṭaṃ | tac ca saṃsārād  
vimocanārthaṃ | kathaṃ punas tad vimocayati | vāsana-bodhana-  
śamana-prativedhais ta(Ns 45a)d vimocayati | śrutena citta-vāsanataḥ |

cintayā bodhanataḥ | bhāvanayā śamathena śamanataḥ | vipaśyanayā  
prativedhataḥ |

**sūtrābhidharma-vinayāś catur-vidhārthā matāḥ samāsenā |**

**teṣāṃ jñānād dhīmān sarvākāra-jñatām eti || XI. 2**

te ca sūtra-vinayābhidharmāḥ pratyekaṃ catur-vidhārthāḥ samāsatas  
teṣāṃ jñānād bodhisatvaḥ sarva-jñatām prāpnoti | śrāvakas tv ekasyā api  
gāthāyā artham ājñāyāsrava-kṣayaṃ prāpnoti |

**āśrayato lakṣaṇato dharmād arthāc ca sūcanāt sūtram |**

**abhimukhato 'tābhikṣṇyād abhibhava-gatito 'bhidharmaś ca ||**

**XI. 3**

Ba.56 katham pratyekaṃ catur-<sup>2)</sup>vidhārthāḥ | āśraya-lakṣaṇa-dharmārtha-sūca-  
nāt sūtram | tatrāśrayo yatra deśe deśitam yena yasmai ca | lakṣaṇam  
saṃvṛti-satya-lakṣaṇam paramārtha-satya-lakṣaṇam ca | dharmāḥ  
skandhāyatana-dhātva-āhāra-pratītya-samutpādayaḥ | artho 'nusaṃdhiḥ |  
abhimukhatvād abhikṣṇatvād abhibhavanād abhigamanaḥ cābhidhar-  
mo veditavyaḥ | nirvāṇābhimukho dharmo 'bhidharmaḥ satya-bodhi-  
pakṣa- vimokṣamukhādi-deśanāt | abhikṣṇam dharmo 'bhidharma ekāi-  
kasya dharmasya rūpya-rūpi-sanidarśanādi-prabhedena bahula-nirdeśāt |  
abhibhavatīty abhidharmaḥ parapravādābhibhavanād vivādādhi-  
karaṇādibhiḥ |

(Ns 45b) abhigamyate sūtrārtha etenēty a[Ns 37a]bhidharmaḥ |

**āpatter utthānād vyutthānān niḥsr̥teś ca vinayatvaṃ |**

**pudgalataḥ prajñapteḥ pravibhāga-viniścayāc cāiva || XI. 4**

L.55 āpattitaḥ samutthānato vyutthānato niḥsaraṇataś ca veditavyaḥ |  
tatrāpattiḥ pañcāpatti-nikāyāḥ | samutthānam āpattinām ajñānāt pra-  
mādāt kleśa-prācuryād anādarāc ca | vyutthānam āśayato na daṇḍa-  
karmataḥ | niḥsaraṇam sapta-vidham | pratideśanā | abhyupagamaḥ  
śikṣā-dattakādinām daṇḍa-<sup>3)</sup>karmaṇāṃ<sup>4)</sup> samavaghatāḥ<sup>5)</sup> prajñapte śikṣāpade  
punaḥ paryāyeṇānujñānāt prasaradbhiḥ samagreṇa samghena śikṣā-



padasya pratiprasrambhaṇāt | āśraya-parivṛttir bhikṣu-bhikṣuṇyoḥ strī-  
puruṣa-vyañjana-parivartanād asādhāraṇā <sup>6)</sup>ced āpattiḥ | bhūta-praty-  
avekṣā dharmôddānākāraiḥ <sup>7)</sup>pratyavekṣā-viśeṣaḥ | dharmatā-prati-  
lambhaś ca satya-darśanena kṣudrānuḥkṣudrāpatty-abhāve <sup>8)</sup>dharmatā-prati-  
lambhāt | punaś catur-vidhenārthena vinayo veditavyaḥ | pudgalato yam  
āgamyā śikṣā prajñāpyate | prajñāptito <sup>10)</sup>yadārocite pudgalāparādhe śāstā  
saṃnipātya <sup>11)</sup>saṃghaṃ śikṣāṃ prajñāpayati | pravibhāgato yaḥ pra-  
jñapte śikṣāpade tad-uddeśasya vibhāgaḥ | viniścayataś ca tatpattih  
kathaṃ bhava(Ns 46a)ty anāpattir vēti nirdhāraṇāt |

ālambana-lābha-paryeṣṭau trayasḥ ślokaḥ |

**ālambanaṃ mato dharmāḥ adhyātmaṃ bāhyakaṃ <sup>12)</sup>dvayaṃ |**

**lābho dvayor dvayārthena dvayoś cānupalambhataḥ || XI. 5**

dharmālambanaṃ yo deśitaḥ kāyādikāṃ cādhyātmikāṃ bāhyam ādhyātmī-  
ka-bāhyaṃ <sup>15)</sup>ca | tatra grāhaka-bhūtaṃ kāyādikam ādhyātmikam grāhya-  
bhūtaṃ bāhyaṃ tasyo[Nc 38b]r eva tathatā-dvayaṃ | tatra dvayor  
ādhyātmika-bāhyayor ālambanayor dvayārthena lābho yathā-kramaṃ |  
yadi grāhyārthād grāhakārtham abhinnaṃ paśyati grāhakārthāc ca  
grāhyārtham dvayasya punaḥ samastasyādhyātmika-bāhyālambanasya  
tathatāyā lābhas tayor eva dvayor anupalambhād veditavyaḥ |

**manojalpair yathôktârtha-prasannasya pradhāraṇāt |**

Ba.57

**artha-khyānasya jalpāc ca nāmni sthānāc ca cetasaḥ || XI. 6**

**dharmālambana-lābhaḥ syāt tribhir jñānaiḥ śrūtādibhiḥ |**

L.56

**trividhālambana-lābhaś ca pūrvôktas tat-samāśritah || XI. 7**

dharmālambana-lābhaḥ punar tribhir jñānair bhavati śruta-cintā-  
bhāvanā-mayaiḥ | tatra samāhitena cetasā manojalpair yathôktârtha-  
prasannasya tat-pradhāraṇāt śruta-mayena jñānena tal-lābhaḥ <sup>17)</sup>| mano-  
jalpair iti saṃkalpaiḥ | prasannasyēty adhi(Ns 46b)muktasya niścitasya |  
pradhāraṇād iti pravicyāt | jalpād artha-khyānasya pradhāraṇāc cintā-  
mayena tal-lābhaḥ | yadi manojalpād evāyam arthaḥ khyātīti paśyati

nānyan manojalpād yathoktaṃ dvayā lambana-lābhe | cittasya nāmnī  
sthānāt bhāvanā-mayena jñānena tal-lābho veditavyo dvayānupalambhād  
yathoktaṃ dvayā lambana-lābhe | ata eva ca sa pūrvōktas trividhā lam-  
bana-lābho dharmā lambana-lābha-saṃnīśrito veditavyaḥ |

manasikāra-paryeṣṭau pañca ślokaḥ |

**tri-dhātukaḥ kṛtya-karaḥ sasambādhaśrayo 'paraḥ |**

**adhimukti-niveśī ca tīvra-cchanda-karo 'paraḥ || XI. 8**

**hīna-pūrṇāśrayo dvedhā sajalpo 'jalpa<sup>18)</sup> eva ca |**

**jñānena saṃpra[Nc 39a]yuktaś ca yogōpaniśad ātmakaḥ || XI. 9**

**saṃbhinnā lambanaś cāsau vibhinnā lambanaḥ sa ca |**

**pañcadhā saptādhā cāiva pariññā pañcadhā 'sya ca || XI. 10**

**catvāraḥ sapta triṃśac ca ākāra bhāvanāgatāḥ |**

**mārga-dvaya-svabhāvo 'sau dvy-anuśaṃsaḥ praticchakaḥ || XI.**

**11**

**prayogī vaśa-vartī ca paritto vipulātmakaḥ |**

**yogināṃ hi manaskāra eṣa sarvātmako mataḥ || XI. 12**

aṣṭādaśa-vidho yoga-manaskāraḥ | dhātu-niyataḥ kṛtya-kara āśraya-  
vibhakto 'dhimukti-niveśakaś cchanda-janakaḥ samādhi-saṃnīśrito (Ns  
47a) jñāna-saṃprayuktaḥ saṃbhinnā lambano vibhinnā lambanaḥ pariññā-  
niyato bhāvanākāra-praviṣṭaḥ śamatha-vipaśyanā-mārga-svabhāvo  
'anuśaṃsa-manaskāraḥ praticchakaḥ prāyogika-manaskāro vaśa-vartī-  
manaskāraḥ paritta-manaskāro vipula-manaskāraś ca | tatra dhātu-  
niyato yaḥ śrāvakādi-gotra-niyataḥ | kṛtya-karo yaḥ saṃbhṛta-saṃ-  
bhārasya | āśraya-vibhakto yaḥ sasambādha-gr̥hasthāśrayo 'sambādha-  
pravrajitāśrayaś ca | adhimukti-niveśako yo buddhānusmṛti-sahagataḥ |  
cchanda-janako yas-tat-saṃpratyaya-sahagataḥ samādhi-saṃnīśrito yaḥ  
samantaka-maula-samādhi-sahagataḥ savitarka-savicārā<sup>20)</sup> vitarka-savicāra-  
mātrāvitarkāvicāra-sahagataś ca | jñāna-saṃprayukto yo yogōpaniśad-  
yoga-sahagataḥ sa punar yathā-kramam śruta-cintā-mayo bhāvanā-mayaś

ca | saṃbhinnāḷambanaḥ pañca-vidhaḥ sūtrōddāna-gāthā-nipāta-yāvad-  
 udgrhīta-yāvad-deśitāḷambanaḥ | vibhinnāḷam[Nc 39b]banaḥ sapta-vidho  
 nāmāḷambanaḥ padāḷambano vyañjanāḷambanaḥ pudgala-nair-  
 ātmyāḷambano dharma-nairātmyāḷambano rūpi-dharmāḷambano 'rūpi-  
 dharmāḷambanaś ca | tatra rūpi-dharmāḷambano yaḥ kāyāḷambanaḥ |  
 arūpi-dharmāḷambano yo vedanā(Ns 47b)-citta-dharmāḷambanaḥ | pari-  
 jñā-niyato yaḥ parijñeye vastuni parijñeye 'rthe parijñāyāṃ parijñā-  
 phale tat-pravedanāyāṃ ca | tatra parijñeyaṃ vastu duḥkhaṃ parijñeyo  
 'rthas tasyāivānitya-duḥkha-sūnyānātmatā | parijñā mārgaḥ | parijñā-  
 phalaṃ vimuktiḥ tat-pravedanā vimukti-jñāna-darśanaṃ | bhāvanākāra-  
 praviṣṭaś catur-ākāra-bhāvanaḥ sapta-triṃśad-ākāra-bhāvanaś ca | tatra  
 catur-ākāra-bhāvanaḥ pudgala-nairātmyākāra-bhāvano dharma-nair-  
 ātmyākāra-bhāvano darśanākāra-bhāvano jñānākāra-bhāvanaś ca | tatra  
 sapta-triṃśad-ākāra-bhāvanaḥ | aśubhākāra-bhāvano duḥkhākāra-  
 bhāvano 'nityākāra-bhāvano 'nātmākāra-bhāvanaḥ smṛty-upasthāneṣu |  
 pratilambhākāra-bhāvano nisevanākāra-bhāvano vinirdhāvanākāra-  
 bhāvanaḥ pratipakṣākāra-bhāvanaḥ samyak-prahāneṣu | saṃtuṣṭi-  
 prātipakṣika-manaskāra-bhāvano yadā cchandaṃ janayati | vikṣepa-  
 saṃśaya-prātipakṣika-manaskāra-bhāvano yadā vyāyacchate vīryam  
 ā[Nc 40a]rabhate yathā-kramaṃ | auddhatya-prātipakṣika-samādhy-  
 ākāra-bhāvano yadā cittaṃ *pragṛhṇāti*<sup>22)</sup> | laya-prātipakṣika-samādhy-  
 ākāra-bhāvano yadā cittaṃ *pradadhāti*<sup>23)</sup> | ete yathā-kramaṃ ca(Ns 48a)-  
 turṣu ṛddhi-pādeṣu veditavyāḥ | sthita-cittasya lokottara-sampatti-saṃ-  
 pratyayākāra-bhāvano yathā saṃpratyayākāra-bhāvana evaṃ vyava-  
 sāyākāra-bhāvano dharmāsaṃpramoṣākāra-bhāvanaś citta-sthity-ākāra-  
 bhāvanaḥ pravacayākāra-bhāvana indriyeṣu | eta eva pañca nirlikhita-  
 vipakṣa-manaskārā baleṣu | saṃbodhi-saṃprakyānākāra-bhāvanas  
 tatrāiva vicayōtsāha-saumanasya-karmaṇyatā-citta-sthiti-samatākāra-  
 bhāvanāḥ sapta-saṃbodhy-aṅgeṣu | prāpti-niścayākāra-bhāvanaḥ pari-

karma-bhūmi-<sup>24)</sup>*saṃlakṣaṇā* kāra-bhāvanaḥ para-saṃprāpty-ākāra-bhāvana  
 ārya-kānta-śīla-praviṣṭākāra-bhāvanaḥ saṃlikhita-vṛtti-samudācār<sup>25)</sup>*ākāra*-  
 bhāvanaḥ pūrva-paribhāvita-pratīlabdha-mārgābhyāsākāra-bhāvano  
 dharma-sṭhiti-nimittāsaṃpramoṣākāra-bhāvano 'nimitta-*citta*-<sup>26)</sup>*stṭhity*-āśraya-  
 parivṛtṭy-ākāra-bhāvanaś ca mārgāṅgeṣu | śamatha-vipaśyanā-bhāvanā-  
 mārga-svabhāvayor na kaścin nirdeśaḥ | anuśaṃsa-manaskāro-dvividho  
 L.58 dauṣṭhulyāpakarṣaṇo drṣṭi-nimittāpakarṣaṇaś ca | praticchako yo  
 dharma-*śrotasī*<sup>27)</sup> buddha-bodhisatvānām antikād avavāda-grāha(Ns 48b)-  
 kaḥ | prāyogika-manaskāraḥ pañcavidhaḥ samādhi-gocare | saṃkhyōpa-  
 lakṣa[Nc 40b]ṇa-prāyogiko yena sūtrādiṣu nāma-pada-vyañjana-saṃ-  
 Ba.59 khyām upalakṣayate | vṛtṭy-uplakṣaṇa-prāyogiko yena dvividhām vṛttim  
 upalakṣayate parimāṇa-vṛttim ca vyañjanānām aparimāṇa-vṛttim ca  
 nāma-padayoḥ | parikalpōpalakṣaṇa-prāyogiko yena dvayam upādāya  
 dvaya-parikalpam upalakṣayate nāma-parikalpam upādāyārtha-pari-  
 kalpam artha-parikalpam upādāya nāma-parikalpam aparikalpam akṣa-  
 raṃ | kramōpalakṣaṇa-prāyogiko yena nāma-graḥaṇa pūrvakām artha-  
 graḥaṇa-pravṛttim upalakṣayate | prativedha-prāyogikaś ca | sa punar  
 ekādaśa-vidho veditavya āgantukatva prativedhataḥ saṃprakhyāna-  
 nimitta-prativedhato 'rthānupalambha-prativedhata upalambhānupa-  
 lambha-prativedhato dharma-dhātu-prativedhataḥ pudgala-nairātmya-  
 prativedhato dharma-nairātmya-prativedhato hināśaya-prativedhata  
 udāra-māhātmyāśaya-prativedhato yathādhigama-dharma-vyavasthāna-  
 prativedhato vyavasthāpita-dharma-prativedhataś ca | vaśavarti-  
 manaskāras trividhaḥ kleśāvaraṇa-suviśuddhaḥ kleśa-jñeyāvaraṇa-su-  
 viśuddho guṇābhinirhāra-suviśuddhaś ca |

dharma-*latvārtha*-<sup>29)</sup>paryeṣṭau dvau ślo(Ns 49a)kau |

tatvaṃ yat satataṃ dvayena rahitaṃ bhrāntes ca saṃniśrayaḥ  
 śakyam nāiva ca sarvathābhilapitum yac cāprapañcātmakam  
 jñeyam heyam atho viśodhyam amalam yac ca prakṛtyā mataṃ

**yasyâkāśa-suvarṇa-vāri-saḍṛṣī kleśād viśuddhir matā || XI. 13**

satataṃ dvayena rahitaṃ tatvaṃ parikalpitaḥ svabhāvo grāhya-grāhaka-lakṣaṇenātyantam a[Nc 41a]-satvāt | bhrānteḥ saṃniśrayaḥ paratantras tena tat-parikalpanāt | anabhilāpyam aprapañcātmakam ca pariniṣpan-<sup>30)</sup> naḥ svabhāvaḥ | tatra prathamam tatvaṃ parijñeyam dvitīyam praheyam tṛtīyam viśodhyaṃ cāgantuka-malād viśuddham ca prakṛtyā yasya pra-  
kṛtyā viśuddhasyâkāśa-suvarṇa-vāri-saḍṛṣī kleśād viśuddhiḥ | na hy âkāśādini prakṛtyā aśuddhāni | na cāgantuka-malāpagamād eṣaṃ viśud-  
dhir nêṣyata iti |

**na khalu jagati tasmād vidyate kiṃcid anyaj**

**jagad api tad aśeṣam tatra saṃmuḍha-buddhi |**

**katham ayam abhirūḍho loka-moha-prakāro**

**yad asad abhiniviṣṭaḥ sat samantād vihāya || XI. 14**

na khalu tasmād evaṃ lakṣaṇād dharma-dhātoḥ kiṃcid anyal loke L.59  
vidyate dharmatāyā dharmasyâ<sup>31)</sup>bhinnatvāt | śeṣam gatārthaṃ |

tatve mâyôpama-paryeṣṭau pañca-daśa ślokaḥ |

**yathā mâyā tathā-bhūta-parikalpo nirucyate |**

**ya(Ns 49b)thā mâyā-kṛtaṃ tadvat dvaya-bhrāntir nirucyate ||**

**XI. 15**

yathā <sup>32)</sup>mâyā-mantra-parigr̥hitaṃ bhrānti-nimittaṃ kâṣṭha-loṣṭâdikaṃ Ba.60  
tathā-bhūta-parikalpaḥ paratantraḥ <sup>33)</sup>svabhāvâkâro veditavyaḥ | yathā  
mâyā-kṛtaṃ tasyāṃ mâyāyāṃ hasty-aśva-suvarṇâdy-ākṛtis tad-bhāvena  
pratibhāsita tathā tasminn abhūta-parikalpe dvaya-bhrāntir grāhya-  
grāhakatvena pratibhāsita parikalpita-svabhāvâkārā veditavyā

**yathā tasmin na tad-bhāvaḥ paramārthas tathêṣyate**

**yathā tasyôpalabbhis tu tathā saṃvṛti satyatā || XI. 16**

yathā tasmin na tad-bhāvo mâyā-kṛte hastitvādy-abhāvas tathā tasmin  
paratantre paramārtha iṣyate parikalpitasya dvaya-lakṣaṇasyâbhāvaḥ |  
yathā tasya mâyā-kṛtasya hasty-âdi-bhāvenôpalabdhis tathā-[Nc 41b]

bhūta-parikalpasya saṃvṛti-satyatōpalabdhiḥ |

**tad-abhāve yathā vyaktis tan-nimittasya labhyate |**

**tathāśraya-parāvṛttāḥ asat-kalpasya labhyate || XI. 17**

yathā māyā-kṛtasyābhāve tasya nimittasya kāṣṭhādikasya vyaktir  
bhūtārthōpalabhyate tathāśraya-parāvṛttau dvaya-bhrānty-abhāvād  
abhūta-parikalpasya bhūto 'rtha upalabhyate |

**tan-nimitte yathā loko hy abhrāntaḥ kāmataś caret |**

**parāvṛttāḥ aparyastaḥ kāmācārī tathā <sup>34)</sup>yatiḥ || XI. 18**

yathā tan-nimitte (Ns 50a) <sup>35)</sup>kāṣṭhādāv abhrānto lokaḥ kāmataś carati  
svatantras tathā āśraya-parāvṛttāḥ aparyasya āryaḥ kāma-cārī bhavati  
svatantraḥ |

**tad-ākṛtiś ca tatrāsti tad-bhāvaś ca na vidyate |**

**tasmād astitva-nāstitvaṃ māyādiṣu vidhiyate || XI. 19**

L.60 eṣa śloko gatārthaḥ |

**na bhāvas tatra cābhāvo nābhāvo bhāva eva ca**

**bhāvābhāvāviśeṣaś ca māyādiṣu vidhiyate || XI. 20**

na bhāvas tatra cābhāvo yas tad-ākṛta-bhāvo nāsau na bhāvaḥ <sup>36)</sup>| nābhāvo  
bhāva eva ca yo hastitvādy-abhāvo <sup>37)</sup>nāsau bhāvaḥ tayoś ca bhāvābhāvayor  
aviśeṣo māyādiṣu vidhiyate | ya eva hi tatra tad-ākṛti-bhāvaḥ | sa eva  
hastitvādy-abhāvaḥ | ya eva hastitvādy-abhāvaḥ sa eva tad-ākṛti-bhāvaḥ |

Ba.61

**tathā dvayābhatātrāsti tad-bhāvaś ca na vidyate |**

**tasmād astitva-nāstitvaṃ rūpādiṣu vidhiyate || XI. 21**

tathā 'trābhūta-parikalpe dvayābhāsātāsti dvaya-bhāvaś ca nāsti | tas-  
mād astitva-nāstitvaṃ rūpādiṣu vidhiyate 'bhūta-parikalpa-svabhavaḥ |

**na bhāvas tatra cābhāvo nābhāvo bhāva eva ca |**

**[Nc 42a]bhāvābhāvāviśeṣaś ca rūpādiṣu vidhiyate || XI. 22**

na bhāvas tatra cābhāvaḥ | yā dvayābhāsatā | nābhāvo bhāva eva ca | yā  
<sup>39)</sup>dvayatā nāstitā | bhāvābhāvāviśeṣaś ca rūpādiṣu vidhiyate || ya eva hi (Ns  
50b) dvayābhāsatāyā bhāvaḥ sa eva dvayasyābhāva iti |

<sup>40)</sup>  
**samāropāpavādānta pratiṣedhārtham iṣyate |**

**hīnayānena yānasya pratiṣedhārtham eva ca || XI. 23**

kim arthaṃ punar ayaṃ bhāvābhāvayor aikāntikatvam aviśesaś cēṣyate  
| yathā-kramaṃ | samāropāpavādānta<sup>41)</sup>-pratiṣedhārtham iṣyate | hīnayāna-  
gamana-pratiṣedhārtham ca | abhāvasya hy abhāvatvaṃ viditvā samāro-  
paṃ na karoti | bhāvasya bhāvatvaṃ viditvāpavādaṃ na karoti | tayoś  
cāviśeṣaṃ viditvā na bhāvād udvijate tasmān na hīnayānena niriyati |

**bhrānter nimittaṃ bhrāntiś ca rūpa-vijñaptir iṣyate |**

**arūpiṇī ca vijñaptir abhāvāt syān na cetarā || XI. 24**

rūpa-bhrānter yā nimitta-vijñaptiḥ sā rūpa-vijñaptir iṣyate rūpākhyā | sā L.61  
tu rūpa-bhrāntir arūpiṇī vijñaptiḥ | abhāvād rūpa-vijñapter itarāpi na syād  
arūpiṇī vijñaptiḥ | kāraṇābhāvāt |

**māyā-hasty-ākṛti-grāha-bhrānter dvayam udāhṛtaṃ**

**dvayaṃ tatra yathā nāsti dvayaṃ cāivôpalabhyate || XI. 25**

**bimba-saṃkalikā-grāha-bhrānter dvayam udāhṛtaṃ |**

**dvayaṃ tatra yathā nāsti dvayaṃ cāivôpalabhyate || XI. 26**

māyā-hasty-ākṛti-grāha<sup>43)</sup>-bhrāntito dvayam udāhṛtaṃ | grāhyaṃ (Ns 51a)  
grāhakaṃ ca tatra yathā nāsti dvayaṃ cāivôpalabhyate | *pratibimba-*  
*saṃkalikā*<sup>44)</sup> ca manasikurvataḥ tad-grāha-bhrā(Nc 42b)nter dvayam udā-  
hṛtaṃ pūrvavat |

**tathā bhāvāt tathā 'bhāvād bhāvābhavāviśeṣataḥ**

Ba.62

**sad-asanto 'tha māyābhā ye dharmā bhrānti-lakṣaṇāḥ || XI. 27**

ye dharmā bhrānti-lakṣaṇā vipakṣa-svabhāvas te sad-asanto māyôpamāś  
ca | kiṃ kāraṇaṃ | santas *tathā bhūvād*<sup>46)</sup> abhūta-parikalpatvena | asantas  
tathā 'bhāvāt grāhya-grāhakatvena | tayoś ca bhāvābhāvayor aviśiṣṭa-  
tvāt santo 'py asanto 'pi māyāpi cāivaṃ *lakṣaṇā*<sup>47)</sup> | tasmān māyôpamāḥ |

**tathā 'bhāvāt tathā 'bhāvāt tathā 'bhāvād alakṣaṇāḥ ||**

**māyôpamāś ca nirdiṣṭā ye dharmāḥ prātipakṣikāḥ || XI. 28**

ye 'pi prātipakṣikā dharmā buddhenôpadiṣṭāḥ smṛty-upasthānādayas te 'py

alakṣaṇā māyāś ca nirdiṣṭāḥ | kiṃ kāraṇaṃ tathā 'bhāvād<sup>50)</sup> yathā bālair  
gr̥hyante | tathā 'bhāvād<sup>51)</sup> yathā deśitāḥ | tathā 'bhāvād yathā saṃdarśitā  
buddhena garbhāvakramaṇa-janmābhiniṣkramaṇābhisam̐bodhy-ādayaḥ |  
evaṃ alakṣaṇā avidyamānāś ca khyānti tasmān māyôpamāḥ |

**māyā-rājēva cānyena māyā-rājñā parājitāḥ |**

**ye sarva-dharmān paśyanti nirmānās<sup>52)</sup> te jinātma<sup>53)</sup>jāḥ || XI. 29**

L.62 ye prātipakṣikā dharmās te māyā-rāja-sthānīyāḥ saṃkleśa-prahāṇe  
vyavadānādhipatyāt | ye 'pi sāmkleśikā dharmās te 'pi rāja-sthānīyāḥ  
saṃkleśa-nirvṛttā<sup>54)</sup> ādhipatyāt | atas taiḥ prātipakṣikaiḥ saṃkleśa-parā-  
jayo māyā-rājñēva rājñāḥ parājayo draṣṭavyaḥ | taj-jñānāc ca bodhisatvā<sup>55)</sup>  
*nirmānā* bhavanti ubhaya-pakṣe |

aupamyārthe [Nc 43a] ślokaḥ |

**māyā-svapna-marici-bimba-sadr̥śāḥ prodbhāsa-śrutkôpamā**

**vijñeyôdaka-candra-bimba-sadr̥śā nirmāṇa-tulyāḥ punaḥ |**

**ṣaṭ ṣaṭ dvau ca punaś ca ṣaṭ dvaya-matā ekâikaśaś ca trayāḥ**

**saṃskārāḥ khalu tatra tatra kathitā buddhair vibuddhôtta<sup>56)</sup>maiḥ ||**

**XI. 30**

yat tûktaṃ bhagavatā māyôpamā dharmā yāvan nirmāṇôpamā iti | tatra  
māyôpamā dharmāḥ ṣaḍ-ādhyātmikāny āyatanāni | asaty ātma-jivādi-  
tve tathā prakhyānāt | svapnôpamāḥ ṣaṭ bāhyāny āyatanāni tad-  
upabhogasyāvastukatvāt | marīcikôpamau dvau dharmau cittaṃ caitasi-  
kāś ca bhrānti-karatvāt | pratibimbôpamāḥ punaḥ ṣaḍ evādhyātmikāny  
āyatanāni pūrva-karma-pratibimbatvāt | pratibhāsôpamāḥ ṣaḍ eva bā-  
hyāny āyatanāny ādhyātmikānām āyatanānām (Ns 52a) chāyā-bhūtatvāt  
Ba.63 tad-ādhipatyôtpattitāḥ | ṣaṭ dvayaṃ matāḥ ṣaṭ dvayamatāḥ | pratīśrut-  
kôpamā deśanā-dharmāḥ | udaka-candra-bimbôpamāḥ samādhi-  
saṃnīśritā dharmāḥ samādher udaka-sthānīyatvād acchatayā | nir-  
māṇôpamāḥ saṃcintya-bhavôpapatti-parigrahe 'saṃkliṣṭa-sarva-kriyā-  
prayogatvāt |



jñeya-paryeṣṭau ślokaḥ |

**abhūta-kalpo na bhūto nābhūto 'kalpa eva ca |**

**na kalpo nāpi cākalpaḥ sarvaṃ jñeyaṃ nirucyate || XI. 31**

abhūta-kalpo yo na lokottara-jñānānukūlaḥ kalpaḥ | na bhūto nābhūto  
yas tad-anukūlo yāvan nirvedha-bhāgīyaḥ | akalpas tathatā lokottaraṃ  
ca jñānaṃ | na kalpo nāpi cākalpo lokottara-prṣṭha-〔Nc 43b〕labdhaṃ L.63  
laukikaṃ jñānaṃ | etāvac ca sarvaṃ jñeyaṃ |

<sup>56)</sup>  
*saṃkleśa*-vyavadāna-paryeṣṭau śloka-dvayaṃ |

**svadhātuto dvayābhāsāḥ sāvīdhyā-kleśa-vṛttayaḥ |**

**vikalpāḥ saṃpravartante dvaya-dravya-vivarjitāḥ || XI. 32**

svadhātuta iti *svabījād*<sup>57)</sup> ālaya-vijñānataḥ | dvayābhāsā iti grāhya-  
grāhakaābhāsāḥ | sahāvidyayā kleśaiḥ ca vṛttir eṣāṃ ta ime sāvīdhyā-kleśa-  
vṛttayaḥ | dvaya-dravya-vivarjitā iti (Ns 52b) grāhya-dravyeṇa grāhaka-  
dravyeṇa ca | evaṃ kleśāḥ paryeṣitavyaḥ |

**ālambana-viśeṣāptiḥ svadhātu-sthāna-yogataḥ |**

**ta eva hy advayābhāsā vartante carma-kāṇḍavat || XI. 33**

ālambana-viśeṣāptir iti yo dharmā lambana-lābhaḥ pūrvaṃ uktaḥ |  
svadhātu-sthāna-yogata iti svadhātur vikalpānāṃ tathatā tatra sthānaṃ<sup>58)</sup>  
nāmni sthānāc cetasaḥ | yogata ity abhyāsāt bhāvanā-mārgeṇa | ta eva  
vikalpā advayābhāsā vartante parāvṛttāśrayasya carmavat kāṇḍavac  
ca | yathā hi kharatvāpagamāt tad eva carma mṛdu bhavati | agni  
saṃtāpanayā tad eva kāṇḍaṃ ṛju bhavati | evaṃ śamatha-vipaśyanā-  
bhāvanābhyāṃ cetāḥ-prajñā-vimukti-lābhe parāvṛttāśrayasya<sup>59)</sup> ta eva  
vikalpā na punar dvayābhāsāḥ pravartante | ity *evam* vyavadānaṃ  
paryeṣitavyaṃ |

vijñaptimātratā-paryeṣṭau dvau ślokau

**cittaṃ dvaya-prabhāsaṃ rāgādy-ābhāsaṃ iṣyate tadvat |**

**śraddhādy-ābhāsaṃ vā na tu dharmāḥ kliṣṭa-kuśalo 'sti || XI. 34**

cittamātram eva dvaya-pratibhāsaṃ iṣyate grāhya-pratibhāsaṃ grāhaka- Ba.64

pratibhāsaṃ ca | [Nc 44a] tathā rāgādi-kleśābhāsaṃ tad evēṣyate  
 śrad(Ns 53a)dhādi-kuśala-dharmābhāsaṃ vā | na tu tad-ābhāsād anyañ  
 kliṣṭo dharmo 'sti rāgādi rāgādi-lakṣaṇaḥ kuśalo vā śraddhādi-lakṣaṇaḥ |  
 yathā dvaya-pratibhāsād anyo na dvaya-lakṣaṇa iti<sup>61)</sup>

**cittaṃ citrābhāsaṃ citrākāraṃ pravartate tacca |**  
**bhāso bhāvābhāvo na tu dharmāṇaṃ atas tatra || XI. 35**<sup>62)</sup>

L.64 cittaṃ eva svataś<sup>65)</sup> citrābhābhāsaṃ pravartate | paryāyeṇa rāgābhāsaṃ  
 vā dveṣābhāsaṃ vā tad-anya-dharmābhāsaṃ vā | citrākāraṃ ca yugapat  
 śraddhādy-ākāraṃ | bhāso bhāvābhāvāḥ kliṣṭa-kuśalāvasthe cetasi | na tu  
 dharmāṇaṃ kliṣṭānāṃ kuśalānāṃ<sup>66)</sup> vā tat-pratibhāsa-vyatirekeṇa tal-  
 lakṣaṇābhāvāt

lakṣaṇa-paryeṣṭau śloka aṣṭau | ekenōddeśaḥ śeṣair nirdeśaḥ |

**lakṣyaṃ ca lakṣaṇaṃ cāiva lakṣaṇā ca prabhedataḥ |**  
**anugrahārthaṃ satvānāṃ sambuddhaiḥ samprakāśitāḥ || XI. 36**

anenōddeśaḥ |

**sadrṣṭikaṃ ca yac cittaṃ tatrāvasthāvikāritā |**

**lakṣyam etat samāsenā hy apramāṇaṃ prabhedataḥ || XI. 37**

tatra cittaṃ vijñānaṃ rūpaṃ ca | drṣṭiś caitasikā dharmāḥ | tatrāvasthā  
 citta-viprayuktā dharmāḥ | avikāritā asaṃskṛtam ākāśādikaṃ tad-  
 vijñapter nityaṃ tathā-pravṛtteḥ | ity etat samāsenā pañca-vidhaṃ lak-  
 ṣyaṃ prabhedenāpramāṇaṃ |

**yathā-jalpārtha-saṃjñā(Ns 53b)yā nimittaṃ tasya vāsanā |**

**tasmād apy artha-vikhyānaṃ parikalpita-lakṣaṇaṃ || XI. 38**<sup>67)</sup>

lakṣaṇaṃ samāsenā trividhaṃ parikalpitādi-lakṣaṇaṃ | tatra parikalpita-  
 lakṣaṇaṃ trividhaṃ yathā-jalpārtha-saṃjñāyā nimittaṃ tasya ca<sup>68)</sup>  
 jalpasya vāsanā tasmāc ca vāsanād yo 'rthaḥ khyāti avyavahāra-  
 kuśalānāṃ vināpi yathā[Nc 44b]-jalpārtha-saṃjñāyā | tatra yathā  
 'bhilāpam artha-saṃjñā caitasikī yathā-jalpārtha-saṃjñā | tasyā yad<sup>69)</sup>  
 ālambanaṃ tan nimittam | evaṃ yac ca parikalpyate yataś ca kāraṇād

vāsanatas tad-ubhayam parikalpita-lakṣaṇam atrābhipretaṃ

**yathā-nāmārtham arthasya nāmnaḥ prakhyānatā ca yā |**

**asat-kalpa<sup>70)</sup>-nimittaṃ hi parikalpita-lakṣaṇam || XI. 39**

apara-paryāyo yathā nāma cārthaś ca yathā-nāmārtham arthasya nām- Ba.65  
naś ca prakhyānatā yathā-nāmārtha prakhyānatā | yadi yathā-nāmārthaḥ  
khyāti yathārthaṃ vā nāma ity etad abhūta-parikalpāḥ lambanaṃ pari-  
kalpita-lakṣaṇam etāvad dhi parikalpyate yaduta nāma vā artho vēti |

**trividha-trividhābhāso grāhya-grāhaka-lakṣaṇaḥ |**

**abhūta-parikalpo hi paratantrasya lakṣaṇam || XI. 40**

trividhas trividhaś cābhāso 'syēti trividha-trividhābhāsaḥ | tatra trivi- L.65  
dhābhāsaḥ pa(Ns 54a)dābhāso 'rthābhāso dehābhāsaś ca | punas trividhā-  
bhāso mana-udgraha-vikalpābhāsaḥ | mano yat kliṣṭaṃ sarvadā | udgrahaḥ  
pañca vijñāna-kāyāḥ | vikalpo manovijñānaṃ | tatra *prathamā* trividhā-  
bhāso grāhya-lakṣaṇaḥ | dvitīyo grāhaka-lakṣaṇaḥ | ity ayaṃ abhūta-  
parikalpaḥ paratantrasya lakṣaṇam |

**abhāva-bhāvātā yā ca bhāvābhāva-samānatā |**

**aśānta-śāntā 'kalpā ca pariniṣpanna-lakṣaṇam || XI. 41**

pariniṣpanna-lakṣaṇam punas tathatā sā hy abhāvātā ca sarva-dharmā-  
ṇāṃ *parikalpitanāṃ bhāvātā*<sup>72)</sup> ca tad-abhāvatvena bhāvāt | bhāvābhāva-  
samānatā ca tayoḥ bhāvābhāvayor abhinnaṭvāt | aśānta cāgantukair  
upakleśaiḥ śā [ Nc 45a ] ntā ca prakṛti-*pariśuddhatvāt*<sup>73)</sup> | avikalpā ca  
vikalpāgocaratvāt niṣprapañcatayā | etena trividhaṃ lakṣaṇam  
tathatāyāḥ paridīpitaṃ svalakṣaṇam [saṃ]kleśa-vyavadāna-lakṣaṇam  
avikalpa-lakṣaṇam ca | uktaṃ trividhaṃ lakṣaṇam |

**niṣyanda<sup>75)</sup>-dharmam ālambya yoniśo manasikriyā |**

**cittasya dhātau sthānaṃ ca sad-asattārtha-paśyanā || XI. 42**

lakṣaṇā punaḥ pañca-vidhā yoga-bhūmiḥ | ādhāra ādhānam ādarśa āloka  
āśrayaś ca | tatrādhāro *niṣyanda*<sup>76)</sup>(Ns 54b)-dharmo yo buddhenādhigamo  
deśitaḥ sa tasyādhigamasya *niṣyandaḥ*<sup>77)</sup> | ādhānaṃ yoniśo manaskāraḥ |

ādarśaḥ cittasya dhātau sthānaṃ samādhir yad etat pūrvaṃ nāmnī  
sthānaṃ uktaṃ | ālokaḥ sad-asatvenārtha-darśanaṃ lokottarā prajñā<sup>78)</sup>  
yayā<sup>79)</sup> sac ca sato yathā-bhūtaṃ paśyaty asac cāsataḥ | āśraya āśraya-parā-  
vṛttih |

**samatā-gamaṇaṃ tasminn ārya-gotraṃ hi nirmalaṃ |**

**samaṃ viśiṣṭaṃ anyūnādhikaṃ lakṣaṇā matā || XI. 43**

- Ba.66 samatā-gamaṇaṃ anāśrava-dhātau ārya-gotre tad-anyair āryaiḥ | tac ca  
nirmalaṃ ārya-gotraṃ buddhānāṃ | samaṃ vimukti-samatayā śrāvaka-  
pratyekabuddhaiḥ | viśiṣṭaṃ pañcabhir viśeṣaiḥ | viśuddhi-viśeṣeṇa  
savāsana-kleśa-viśuddhitaḥ | pariśuddhi-viśeṣeṇa kṣetra-pariśuddhitaḥ |  
kāya-viśeṣeṇa dharma-kāyatayā | saṃbhoga-viśeṣeṇa parśan-maṇḍaleṣv  
avicchinna-dharma-saṃbhoga-pravartanataḥ | karma-viśeṣeṇa ca tuṣita-  
bhavana-vāsādi-nirmāṇaiḥ satvārtha-kriyānuṣṭhānataḥ | na ca tasyō-  
natvaṃ saṃkleśa-pakṣa-nirodhe nādhikatvaṃ vyavadā(Ns 45b)na-pakṣō-  
L.66 tpāda ity eṣā pañca-vidhā yoga-bhūmir lakṣaṇā | tayā hi tal-lakṣyaṃ  
lakṣaṇaṃ ca lakṣyate |

vimukti-paryeṣtau ṣaḍ (Na 55a) ślokaḥ |

**padārtha-deha-nirbhāsa-parāvṛttir anāsravaḥ |**

**dhātur bija-parāvṛtteḥ sa ca sarvatragāśrayaḥ || XI. 44**

bija-parāvṛtter ity ālaya-vijñāna-parāvṛttitaḥ | padārtha-deha-nirbhāsā-  
nāṃ vijñānānāṃ parāvṛttir anāsravo dhātur vimuktiḥ | sa ca sarva-  
tragāśrayaḥ śrāvaka-pratyeka-buddha-gataḥ |

**caturdhā vaśitā-vṛtter manasaś cōdgrahasya ca |**

**vikalpasyāvikalpe hi kṣetre jñāne 'tha karmaṇi || XI. 45**

manasaś cōdgrahasya ca vikalpasya cāvṛtteḥ parāvṛtter ity arthaḥ |  
caturdhā vaśitā bhavati yathā-kramam avikalpe kṣetre jñāna-karmaṇoś  
ca |

**acalādi-tribhūmau ca vaśitā sā caturvidhā |**

**dvidhāikasyāṃ tad-anyasyāṃ ekāikā vaśitā matā || XI 46**

sā cēyam acalādi-bhūmi-traye caturdhā vaṣitā veditavyā | ekasyām  
acalāyām bhūmau dvividhā | avikalpe cānabhisamskāra-nīrvikalpatvāt |  
kṣetre ca buddha-kṣetra-pariśodhanāt | tad-anyasyām bhūmāv ekāikā  
vaṣitā sādhumatyām jñāna-vaṣitā pratisamvid-viśeṣa-lābhāt | dharma-  
meghāyām karmaṇy abhijñā-karmaṇām avyāghātāt |

**viditvā nairātmyaṃ dvividhaṃ iha dhīmān bhava-gataṃ |**

**samaṃ tac ca jñātvā praviśati sa tatvaṃ grahaṇataḥ |**

**tatas tatra sthānān manasa i(Ns 55b)ha na khyāti tad api**

**tad-akhyānaṃ muktiḥ parama upalambhasya vigamaḥ || XI. 47**

aparo vimukti-paryāyaḥ | dvividhaṃ nairā(Nc 44a)-tmyaṃ viditvā bhava- Ba.67  
traya-gataṃ bodhisatvaḥ samaṃ tac ca jñātvā dvividha-nairātmyaṃ  
parikalpita-pudgalābhāvāt parikalpita-dharmābhāvāt na tu sarvathāivā-  
bhāvataḥ | tatvaṃ praviśati vijñapti-mātratāṃ grahaṇato grahaṇa-  
mātram etad iti | tatas tatra tatva-vijñapti-mātra-sthānān manasas tad  
api tatvaṃ na khyāti vijñapti-mātraṃ | tad-akhyānaṃ muktiḥ parama L.67  
upalambhasya yo vigamaḥ pudgala-dharmayor anupalambhāt |

**ādhāre saṃbhārād ādhāne sati hi nāma-mātraṃ-paśyan |**

**paśyati hi nāma-mātraṃ tat paśyaṃs tac ca nāiva paśyati**

**bhūyaḥ || XI. 48**

apara-paryāyaḥ | ādhāra iti śrutau saṃbhārād iti saṃbhārta-saṃbhārasya  
pūrva-saṃbhāra-labdhāt | ādhāne satīti yoniśo-manaskāre nāma-mātraṃ  
paśyann ity abhilāpa-mātram artha-rahitaṃ | paśyati hi nāma-mātraṃ iti  
vijñapti-mātraṃ nāma arūpiṇaś catvāraḥ skandhā iti kṛtvā tat-paśyaṃs  
tad api bhūyo nāiva paśyaty arthābhāve tad-vijñapti-adarśanād ity ayam  
anupalambho vimuktiḥ |

**cittam etat sadauṣṭhulyam ātma-darśana-pā(Ns 56a)śītam |**

**pravartate nivr̥ttis tu tad-adhyātma-sthiter matā || XI. 49**

apara-prakāraś cittam etat sadauṣṭhulyaṃ pravartate janmasu | ātma-  
darśana-pāśītam iti dauṣṭhulya-kāraṇaṃ darśayati | dvividhenātma-

darśanena pāṣitam ataḥ sadauṣṭhulyam iti | nivṛttis tu tad-adhyātma-  
sthitir iti tasya cittasya citta evāvasthānād ālambanānupalambhataḥ |  
niḥsvabhāvatā-paryeṣṭau śloka-dvayaṃ |

**svayaṃ svenā<sup>(83)</sup>tmanā 'bhāvāt svabhāve cānavasthiteḥ |**  
**grāhavat tad-abhāvāc<sup>(84)</sup> ca niḥsvabhāvatvaṃ iṣyate || XI. 50**

svayaṃ abhāvān niḥsvabhāvatvaṃ dharmāṇāṃ pratyayādhinatvāt |  
svenātmanā 'bhāvān niḥsvabhāvatvaṃ niruddhānāṃ punas tenātmanā-  
nutpatteḥ | *svabhāve<sup>(86)</sup>* 'navasthitatvān niḥsvabhāvatvaṃ kṣanikatvād ity  
etat trividhaṃ niḥsvabhāvatvaṃ saṃskṛta-lakṣaṇa-trayānugaṃ vedi-  
tavyaṃ | grāhavat tad-abhāvāc ca niḥsvabhāvatvaṃ tad-abhāvād iti  
*svabhāvābhāvāt<sup>(87)</sup>* | yathā bālānāṃ svabhāva-grāho nitya-sukha-*śūcy-ātmā<sup>(88)</sup>*  
vā 'nyena vā parikalpita-lakṣaṇena tathāsau svabhāvo nāsti tasmād api  
niḥsvabhāvatvaṃ dharmāṇāṃ iṣyate |

**niḥsvabhāvatayā siddhā uttarōttara-niśrayāt<sup>(89)</sup> |**  
**anutpannāniruddhādi-śānta-prakṛti-nirvṛtāḥ<sup>(90)</sup> || XI. 51**

L.68  
Ba.68

*siddhā<sup>(91)</sup>* niḥsvabhāvatayā 'nutpādādayaḥ | (Ns 56b) yo hi niḥsvabhāvaḥ so  
'nutpanno yo 'nutpannaḥ so 'niruddho yo 'niruddhaḥ sa ādi-śānto ya  
ādi-śāntaḥ sa prakṛti-parinirvṛta ity evaṃ uttarōttara-niśrayair ebhir  
*niḥsvabhāvatādibhir<sup>(92)</sup>* niḥsvabhāvatayā 'nutpādādayaḥ siddhā bhavanti |  
*anutpattika<sup>(93)</sup>*-dharma-kṣānti-paryeṣṭau āryā |

**ādau tatve 'nyatve svalakṣaṇe svayaṃ athānyathā-bhāve |**  
**saṃkleṣe 'tha viśeṣe kṣāntir anutpatti-dharmôktā || XI. 52**

aṣṭāsv anutpatti-dharmeṣu kṣāntir anutpattika-dharma-kṣāntiḥ | ādau  
saṃsārasya na hi tasyādy-utpattir asti | tatve 'nyatve ca pūrva-  
paścimānāṃ na hi saṃsāre teṣāṃ eva dharmāṇāṃ utpattir ye pūrvam  
utpannās tad-bhāvenānutpatteḥ | na cānyeṣāṃ apūrva-prakārānutpatteḥ |  
svalakṣaṇe parikalpitasya svabhāvasya na [Nc 47a] hi tasya kadācid  
utpattiḥ | svayaṃ anutpattau paratantrasya | anyathā-bhāve pariniṣ-  
pannasya na hi tad-*anyathā-bhāvasyô<sup>(94)</sup>*tpattir asti | saṃkleṣe prahīṇe na hi

kṣaya-jñāna-lābhinaḥ saṃkleśasyôtpattiṃ punaḥ paśyanti | viśeṣe  
buddha-dharma-kāyānāṃ na hi teṣāṃ viśeṣôtpattir asti | ity ete(Ns 57a)ṣv  
anutpatti-dharmeṣu kṣāntir anutpatti-dharmôktā |  
ekayānatā-paryeṣṭau sapta ślokāḥ |

**dharma-nairātmya-mukṭināṃ tulyatvāt gotra-bhedataḥ |**

**dvy-āśayāpteś ca nirmāṇāt-paryantād ekayānatā || XI. 53**

dharma-tulyatvād ekayānatā śrāvakādināṃ dharma-dhātor abhinna-  
tvāt yātavyaṃ yānam iti kṛtvā | nairātmyasya tulyatvād ekayānatā  
śrāvakādināṃ ātmābhāvataḥ-sāmānyād yātā yānam iti kṛtvā | vimukti-  
tulyatvād ekayānatā yāti yānam iti kṛtvā | gotra-bhedād ekayānatā |  
aniyata-śrāvaka-gotrāṇāṃ mahāyānena niryāṇād yānti tena yānam iti  
kṛtvā | dvy-āśayāpter eka-yānatā buddhānāṃ ca sarva-satveṣv ātmāśaya-  
prāpteḥ śrāvakāṇāṃ ca tad-gotra-niyatānāṃ pūrvaṃ bodhi-saṃbhāra  
*caritānām ātmani* <sup>99)</sup> *buddhāśaya* <sup>100)</sup>-prāpter abhinna-saṃtānādhimokṣa-lābhato  
buddhānubhāvena tathāgatānugraha-viśeṣa-pradeśa-lābhāya ity ekatvā-  
śaya-lābhenāikatvāt buddha-tac-chrāvakāṇāṃ ekayānatā | nirmāṇād  
eka-yānatā yathôktam aneka-śata-kṛtvo 'haṃ śrāvakayānena parinir-  
vṛta iti vineyānāṃ arthe tathā nirvāṇa-saṃ(Ns 57b)darśanāt | paryantād  
apy eka-yānatā yataḥ pareṇa yātavyaṃ nāsti tad-yānam iti kṛtvā |  
buddhatvam eka-yānam evaṃ tatra tatra sūtre tena <sup>101)</sup> *tenā* [Nc 47b]bhi- L.69  
prāyeṇāika-yānatā veditavyā na tu yāna-trayaṃ nāsti |

kim arthaṃ punas tena tenābhiprayeṇāika-yānatā buddhair deśitā | Ba.69

**ākaraṣaṇārtham ekeṣāṃ anya-saṃdhāraṇāya ca |**

**deśitāniyatānāṃ hi saṃbuddhair eka-yānatā || XI. 54**

ākaraṣaṇārtham ekeṣāṃ iti ye śrāvaka-gotrā aniyatāḥ | anyeṣāṃ ca saṃ-  
dhāraṇāya ye bodhisatva-gotrā aniyatāḥ |

**śrāvako 'niyato dvedhā drṣṭādrṣṭārtha-yānataḥ |**

**drṣṭārtho vita-rāgaś cāvita-rāgo 'py asau mṛduḥ || XI. 55**

śrāvakaḥ punar aniyato dvidvidho veditavyaḥ | drṣṭārtha-yānaś ca yo

dr̥ṣṭa-satyō mahāyānena niryāti adṛṣṭārtha-yānaś ca yo na dr̥ṣṭa-satyō  
mahāyānena niryāti | dr̥ṣṭārthaḥ punas vīta-rāgaś cāvīta-rāgaś ca kāmē-  
bhyaḥ | asau ca mṛdur-dhandha-gatiko veditavyaḥ |

yo dr̥ṣṭārtho dvividho uktaḥ |

**tau ca labdhārya-mārgasya bhavēṣu pariṇāmanāt |**

**acintya-pariṇāmiḥ upapattī samanvītau || XI. 56**

tau ca dr̥ṣṭārthau labdhārya-mārgasya bhavēṣu pariṇāmanāt | (Ns 58a)  
acintya-pariṇāmiḥ upapattī samanvāgatau veditavyau | acintyo hi  
tasyārya-mārgasya pariṇāma upapattau tasmād acintya-pariṇāmiḥ |

**pranīdhāna-vaśād eka upapattiṃ prapadyate |**

**eko 'nāgāmitā-yogān nirmāṇaiḥ pratipadyate || XI. 57**

tasyoś cāikaḥ pranīdhāna-vaśād upapattiṃ gr̥hṇāti yathēṣṭaṃ yo na  
vīta-rāgaḥ | eko 'nāgāmita-yoga-balena nirmāṇaiḥ |

**nirvāṇābhīratatvāc ca tau dhandha-gatikau matau |**

**[Nc 48a] punaḥ punaḥ svacittasya samudācāra-yogataḥ || XI. 58**

L.70 tau ca nirvāṇābhīratatvād ubhāv api dhandha-gatikau matau ciratareṇā-  
bhisam̐bodhataḥ | svasya śrāvaka-cittasya nirvit-sahagatasyābhīkṣṇaṃ  
samudācārāt |

**so 'kṛtārtho hy abuddhe ca jāto dhyānārtham udyataḥ |**

**nirmāṇārthī tad-āśrītya parāṃ bodhiṃ avāpnute || XI. 59**

Ba.70 yaḥ punar asāv avīta-rāgo dr̥ṣṭa-satyāḥ so 'kṛtārthaḥ śaikṣo bhavan  
buddha-rahita kāle jāto dhyānārtham udyato bhavati nirmāṇārthī | tac ca  
nirmāṇam āśrītya krameṇa parāṃ bodhiṃ prāpnoti | tam avasthā-traya-  
sthaṃ sam̐dhāyōktaṃ bhagavatā śrīmālā-sūtre | śrāvako bhūtvā<sup>(118)</sup> praty-  
ekabuddho bhavati punaś ca buddha iti | agni-(Ns 58b) *dr̥ṣṭāntena* yadā ca  
pūrvam dr̥ṣṭa-satyāvasthā yadā buddha-rahite kāle svayaṃ dhyānam  
utpādyā janma-kāyaṃ tyaktvā nirmāṇa-kāyaṃ gr̥hṇāti yadā ca parāṃ  
bodhiṃ prāpnotīti |

vidyā-sthāna-paryeṣṭau ślokaḥ |



**vidyā-sthāne pañca-vidhe yogam akṛtvā**

**sarva-jñatvaṃ nāiti kathaṃ cit paramāryaḥ |**

**ity anyeṣāṃ nigrahaṇānugrahaṇāya**

**svajñārthaṃ vā tatra karoty eva sa yogam || XI. 60**

pañca-vidhaṃ vidyā-sthānaṃ | adhyātma-vidyā hetu-vidyā śabda-vidyā  
cikitsā-vidyā śilpa-karma-sthāna-vidyā ca | tad yad-arthaṃ bodhisatvena  
paryeṣitavyaṃ tad darśayati | sarva-jñatva-prāpty-arthaṃ abhedena sar-  
vaṃ | bhedena punar hetu-vidyāṃ śabda-vidyāṃ ca paryeṣate nigrahār-  
thaṃ anyeṣāṃ tad-anadhimuktānāṃ | cikitsā-vidyāṃ śilpa-karma-sthāna-  
vidyāṃ cānyeṣāṃ anugrahārthaṃ [Nc 48b] tad-arthikānāṃ | adhyātma-  
vidyāṃ svayam ājñārthaṃ |

dhātu-puṣṭi-paryeṣtau trayodaśa-ślokaḥ | pāramitā-paripūraṇārthaṃ ye L.71  
pāramitā-pratiṣamṃyuktā eva manasikārā dhātu-puṣṭaye bhavanti ta etā-  
bhir gāthābhir deśitāḥ | <sup>(104)</sup> *tatrēyam-ādi-gāthā* | <sup>(105)</sup>

**hetūpalabdhi-tuṣṭiś ca niśraye tad-anusmṛtiḥ |**

**sādhāraṇa-phalēcchā ca yathā-boddhā (Ns 59a) dhimucyanā || XI.**

**61**

te punar hetūpalabdhi-tuṣṭi-manasikārāt | yāvad-agratvātmāvadhāraṇa-  
manasikāraḥ | tatra hetūpalabdhi-tuṣṭi-manasikāra ādita eva tāvat |  
gotra-stho bodhisatvaḥ svātmani pāramitānāṃ gotraṃ paśyan  
hetūpalabdhi-tuṣṭyā pāramitā-dhātu-puṣṭiṃ karoti | gotra-stho 'nuttarā-  
yāṃ samyak-sambodhau cittam utpādayatīty ato 'nantaraṃ niśraya-  
tad-anusmṛti-manasikāraḥ | sa hi bodhisatvaḥ svātmani pāramitānāṃ  
saṃniśraya-bhūtaṃ bodhicittaṃ samanupaśyann evaṃ manasikaroti  
niyatam etāḥ pāramitāḥ paripūriṃ gamiṣyanti | tathā hy asmākaṃ  
bodhicittaṃ saṃvidyate iti | utpādita-bodhicittasya pāramitābhiḥ sva-  
parārtha-prayoge sādhāraṇa-phalēcchā-manasikāra āsāṃ pāramitā-  
nāṃ para-sādhāraṇaṃ vā phalaṃ bhavaty anyathā vā mā bhūd ity  
abhisaṃskaraṇāt | svaparārthaṃ prayujyamāno 'saṃkleśōpāyaṃ tatvār-

thaṃ pratividyatīty ato 'nantaraṃ yathā-bodhādhimucyanā-(Ns 59b)  
 manasikāraḥ | evaṃ sarvatrānukramo veditavyaḥ | yathā buddhair  
 bhagavadbhiḥ pāramitā abhisambuddhā abhisambhotsyante 'bhisambu-  
 dhyante ca tathā 'ham adhimucye ity abhisamskaraṇāt |

Ba.71

**caturvidhānubhāvena priyaṇākheda-nīscayaḥ |**

**〔Nc 49a〕 vipakṣe pratipakṣe ca pratipattiś caturvidhā || XI. 62**

anubhāva-priyaṇā-manasikāraś caturvidhānubhāva-darśana-priyaṇā  
 caturvidhānubhāvo vipakṣa-prahāṇaṃ sambhāra-paripākaḥ svaparānu  
 graha āyatyāṃ vipākaphala-<sup>109)</sup>niṣyandaphala-dānatā ca | satva-svabu-  
 ddhadharma-paripākam ārabhyākheda-nīscaya-manasikāraḥ sarva-  
 satva-vipratipattibhiḥ sarva-duḥkhāpattipātaiś cākheda-nīscayābhisam-  
 skaraṇāt | parama-bodhi-prāptaye vipakṣe pratipakṣe ca caturvidha-  
 pratipatti-manasikāraḥ | dānādi-vipakṣāṇaṃ ca mātṣaryādinām prati-  
 deśanā pratipakṣāṇaṃ ca dānādinām anumodanā tad-adhipateya-dharma-  
 deśanārthaṃ ca buddhādhyeṣaṇā | tāsāṃ ca bodhau pariṇāmanā |

L.72

**prasādaḥ sampratīcchā ca dāna-cchandaḥ paratra ca |**

**saṃnāhaḥ praṇidhānaṃ ca abhinanda manaskriyā || XI. 63**

adhimukti-balādhānatām ārabhya pārami(Ns 60a)tādhipateya-dharmā-  
 rthe ca prasāda-manasikāraḥ | dharma-paryeṣṭim ārabhya sampratī-  
 cchana-manasikāras tasyāiva dharmasyāpratibahana-yogena parigra-  
 haṇatayā | <sup>109)</sup>deśanām ārabhya dāna-cchanda-manasikāro dharmasyārtha-  
 sya ca prakāśanārthaṃ pareṣāṃ | pratipattim ārabhya saṃnāha-  
 manasikāro dānādi-paripūraye saṃnahanāt | praṇidhāna-manasikāras  
 tat-paripūri-<sup>110)</sup>pratyaye samavadhānārthaṃ | abhinanda-manasikāro 'ho  
 bata dānādi-pratipattiyā samyak sampādayeyam ity abhinandanāt | eta  
 eva trayo manasikā(Nc 49b)rā avavādānuśāsanyāṃ yojayitavyāḥ | upā-  
 yōpasamhita-karma-manasikāraḥ samkalpaiḥ sarva-prakāra-dānādi-pra-  
 yoga-manasikaraṇāt |

**śakti-lābhe sad-autsukyāṃ dānādau śaḍvidhe ghaṇaṃ |**

**paripāke 'tha pūjāyām sevāyām anukampanā || XI. 64**

autsukya-manasikāraś caturvidhaḥ | śakti-lābhe ca dānādaḥ ṣaḍvidhe  
dāna-dāne yāvat prajñā-dāne | evaṃ śilādiṣu ṣaḍvidheṣu | pāramitābhir  
eva saṃgraha-vastu-prayogeṇa satva-paripāke | pūjāyām ca dānena  
lābha-satkāra-pūjāyā | śeṣābhiś ca pratipatti-pūjāyā | aviparīta-pāra-  
mitōpadeś<sup>III)</sup> *ârtham* ca kalyāṇamitra-(Ns 60b)sevāyām autsukya-manasi-  
kāro veditavyaḥ | anukampā-manasikāraś caturbhir apramāṇair dānādy-  
upasaṃhāreṇa maitrayataḥ | mātṣaryādi-samavadhānena satveṣu karuṇā-  
yataḥ | dānādi-samanvāgateṣu muditāyataḥ | tad-asamkleśādhimokṣataś  
ca upekṣāyataḥ |

**akṛte kukṛte lajjā kaukrtyam viṣaye ratih |**

**amitra-saṃjñā khede ca racanôdbhavanā-matih || XI. 65**

hrī-dharmam ārabhya lajjā-manaskāro 'krteṣu vā dānādiṣv aparipūrṇa- Ba.72  
mithyākrteṣu vā lajjā lajjāyamānaś ca pravṛtti-nivṛtṭy-artham anānuṣaṅ-  
gikaṃ kaukrtyāyate | dhṛtim ārabhya rati-manaskāro dānādy-ālabhane  
'vikṣepataś cittasya dhāraṇāt | akheda-manaskāro dānādi-prayoga- L.73  
parikhede śatru-saṃjñā-karaṇāt | racanā-cchanda-manaskāraḥ pāramitā-  
pratisaṃyukta-śāstra-racanābhisamskaraṇāt | loka-jñatām ārabhya  
udbhāvanā-manaskāras tasyāiva śāstrasya loke yathā-bhājanam ud-  
bhāvanābhisamskaraṇāt |

**dānādayaḥ pratisaraṇaṃ saṃbodhau nêśvarādayaḥ ||**

**doṣaṇām ca guṇānām ca [Nc 50a] pratisaṃvedanā dvayoh || XI.**

**66**

pratisaraṇa-manaskāro bodhi-prāptaye dānādīnām pratisaraṇān  
nêśvarādīnām (Ns 61a) pratisaṃvin-manaskāro mātṣarya-dānādi-  
vipakṣa-pratipakṣayor doṣa-guṇa-pratisaṃvedanāt |

**cayānusmaraṇa-prītir mātṛthyasya ca darśanaṃ |**

**yoge 'bhiḷāṣo 'vikalpe tad-dhṛtyām pratyayāgame || XI. 67**

cayānusmaraṇa-prīti-manaskārôdānādy-upacaye puṇya-jñāna-saṃbhārô-

pacaya-saṃdarśanāt | mähārthya-saṃdarśana-manaskāro dānādināṃ  
 bodhipakṣe bhāvārthena mahābodhi-prāpty-artha-saṃdarśanāt | abhilāṣa-  
 manaskāraḥ sa punaś caturvidhaḥ | yogābhilāṣa-manaskāraḥ śamatha-  
 vipaśyanā-yoga-bhāvanābhilāṣāt | avikalpābhilāṣa-manaskāraḥ pāra-  
 mitā-paripūraṇārtham upāya-kausalyābhilāṣāt | dhṛty-abhilāṣa-manas-  
 kāraḥ pāramitādhipateya-dharmārtha-dhāraṇābhilāṣāt | pratyayābhi-  
 gamābhilāṣa-manaskāraḥ samyak-praṇidhānābhisamskaraṇāt |

**sapta-prakārāsad-grāha-vyutthāne śakti-darśanam |**

**āścaryam cāpy anāścaryam saṃjñā cāiva caturvidhā || XI. 68**

sapta-prakārāsad-grāha-vyutthāna-śakti-darśana-manaskāraḥ | saptavi-  
 dho 'sad-grāhaḥ | asati sad-grāho doṣavati guṇavatva-grāho guṇavatya-  
 agūṇavatva-grāhaḥ | sarva-saṃskāreṣu ca nitya-sukhāsad-grāhau | sarva-  
 dharmeṣu cātmāsa(Ns 61b)d-grāhaḥ | nirvāṇe cāśāntāsad-grāhaḥ | yasya  
 pratipakṣeṇa *śūnyatādi*-samādhi-trayaṃ dharmōddāna-catuṣṭayaṃ ca  
 deśyate | āścarye caturvidha-saṃjñā-manaskāraḥ | pāramitāsūdhāra-  
 saṃjñā āyatatva-saṃjñā pratikāra-nirapekṣa-saṃjñā vipāka-nirapekṣa-  
 saṃjñā ca | anāścarye 'pi *caturvidha-saṃjñā-manaskāra*[Nc 50b]ś *catur-*  
*vidham* anāścaryam audarya āyatatve ca sati pāramitānāṃ buddhatva-  
 phalābhinirvarttanāt | asminn eva ca dvaye sati svapara-samacittāva-  
 sthāpanā | tad-viśiṣṭebhyaś ca *śakrādibhyaḥ* pūjādi-lābhe sati pratikāra-  
 nirapekṣatā | [*sarva-lokebhyo abhyudgata-śarīra-bhoga-lābhe saty api vipā-*  
*ka-nirapekṣatā* |

**samatā sarva-satveṣu dṛṣṭiś cāpi mahātmikā |**

**pratikāraḥ para-guṇāc ca tryāśastir niranantaraḥ || XI. 69**

samatā-manaskāraḥ sarva-satveṣu dānādibhiḥ samatā-pravṛtṭy-abhisam-  
 skaraṇāt | mahātma-dṛṣṭi-manaskāraḥ sarva-satvōpakāratayā pāramitā-  
 saṃdarśanāt | ] pratyupakārāśaṃsana-manaskāro dānādi-guṇa-pravṛtṭyā  
 parebhyaḥ | āśāsti-manaskāraḥ satveṣu tri-sthānā-śaṃsanāt pāramitānāṃ  
 bodhisatva-bhūmi-niṣṭhāyā buddha-bhūmi-niṣṭhāyā satvārthācaraṇā-saṃ-

*sanāc ca | nirantara-manaskāro dānādibhir avandhya-kāla-karaṇābhisams-*  
*karaṇāt |*

**buddha-praṇītānuṣṭhānād arvāg asthāna-cetanā** <sup>(127)</sup> |

**tad-dhāni-vṛddhyā satveṣu anāmodaḥ pramodanā || XI. 70**

samyakprayoga-manaskāro 'viparītānuṣṭhānād arvāg asthā(Ns 62a)na-  
manasikaraṇāt | anāmoda-manaskāro dānādibhir hiyamāneṣu | pramoda-  
manaskāro dānādibhir vardhamāneṣu satveṣu |

**prativarṇikā-bhūtāyām bhāvanāyām ca nāruciḥ** <sup>(128)</sup>

**nādhivāsa-manaskāro vyākṛte niyate sprhā** <sup>(130)</sup> || XI. 71

aruci-manaskāraḥ pāramitā-prativarṇikā-bhāvanāyām | ruci-manaskāro  
bhūtāyām | anādhivāsanā-manaskāro mātśāryādi-vipakṣa-vinaya-  
nābhisamskāraṇāt | sprhā-manaskāro dvividhaḥ pāramitā-paripūri-  
vyākāraṇa-lābha-sprhā-manaskāraḥ pāramitā-niyatabhūmy-avasthā-  
lābha-sprhā-manaskāraś ca |

**āyātyām darśanād vṛtti-ce(Nc 51a)tanā samatēkṣanā |**

**agra-dharmeṣu vṛtṭyā ca agratvātmāvadhāraṇā** <sup>(131)</sup> || XI. 72

āyātyām darśanād vṛtti-manaskāro *yasmīn gatīm* <sup>(133)</sup> gatvā bodhisatvena  
satā 'vaśya-karaṇīyatā 'bhisamskāraṇāt dānādīnām | <sup>(134)</sup>

samatekṣanā-manaskāras tad-anyair bodhisatvaiḥ sahātmanaḥ pāra- L.75  
mitā-sātātya-karaṇādhimokṣārthaḥ | agratvātmāvadhāraṇa-manas-  
kāraḥ pāramitāgradharma-pravṛtṭyā svātmanaḥ pradhāna-bhāva-saṃ-  
(Ns 62b)darśanāt | <sup>(135)</sup>

**ete śubha-manaskārā daśa-pāramitānvayāḥ ||**

Ba.74

**sarvadā bodhisatvānām dhātu-puṣṭau bhavanti hi || XI. 73**

iti nigamana-śloko gatārthaḥ |

dhama-paryeṣṭi-prabhede <sup>(136)</sup> dvau ślokau |

**puṣṭer adhyāśayato mahatī paryeṣṭir iṣyate dhīre |**

**savivāsā hy avivāsā tathāiva vaibhūtvikī teṣāḥ || XI. 74**

**a-sa-kāyā labdha-kāyā** <sup>(137)</sup> prapūrṇa-kāyā ca bodhisatvānām |

138)

**bahumāna-sūkṣmamānā nirmānā cāiṣaṇābhimatā || XI. 75**

trayodaśa-vidhā paryeṣṭiḥ | puṣṭitaḥ śrutādhimukti-puṣṭyā | adhyāśayato  
 dharma-mukha-śrotasā | mahatī vibhuta<sup>139)</sup>-lābhinām | savipravāsā pra-  
 thamā | avipravāsā dvitīyā vaibhutvikī tṛtīyā | akāyā śruta-cintā-mayī  
 dharmakāya-rahitatvāt | sakāyā bhāvanā-mayī adhimukti-caryā-bhūmau  
 | labdha<sup>140)</sup>-kāyā saptasu bhūmiṣu | paripūrṇa-kāyā śeṣāsu | bahumānādhi-  
 mukti-caryā-bhūmau | sūkṣmamānā saptasu | nirmāṇā śeṣāsu |  
 dharma-hetutva-paryeṣṭau ślokaḥ |

141)

**rūpârūpe dharmo lakṣaṇa-hetus tathâiva cārogye |**  
**aiśvarye 'bhijñābhis tad-akṣayatve ca dhīrāṇām || XI. 76**

(Ns 63a) rūpe lakṣaṇa-hetur dharmāḥ | [Nc 51b] arūpe ārogya-hetuḥ  
 kleśa-vyādhi-praśamanāt | aiśvarya-hetur abhijñābhis tad-akṣayatva-  
 hetuś cānupadhis-śeṣa-nirvāṇe 'py anupacchedāt | ata evōktaṃ brahma-  
paripṛcchā-sūtre<sup>142)</sup> | caturbhir dharma<sup>143)</sup> samanvāgatā bodhisatvā dharmam  
 paryeṣante | ratna-saṃjñayā durlabhārthena bhaiṣajya-saṃjñayā kleśa-  
 vyādhi-praśamanārthena artha-saṃjñayā avipraṇāśārthena nirvāṇa-  
 saṃjñayā sarva-duḥkha-praśamanārthena | ratna-bhūtāni hi lakṣaṇāni  
 śobhā-karatvād atas tad-dhetutvād dharma-ratna-saṃjñā | ārogya-  
 hetutvād bhaiṣajya-saṃjñā abhijñāiśvarya-hetutvād artha-saṃjñā | tad-  
 akṣaya-hetutvān nirvāṇa-saṃjñāḥ akṣaya-nirbhayatārthena |

vikalpa-paryeṣṭau ślokaḥ

144)

**abhāva-bhāvādhy-apavāda-kalpā**  
**ekatva-nānā-sva-viśeṣa-kalpāḥ |**  
**yathārtha-nāmābhīniveśa-kalpāḥ |**  
 145)

**jinātma-jaiḥ saṃparivarjanīyāḥ || XI. 77**

daśavidha-vikalpo bodhisatvena parivarjanīyaḥ | abhāva-vikalpo yasya  
 pratipakṣeṇāha | prajñāpāramitāyām<sup>146)</sup> iha bodhisatvo bodhisatva eva sann  
 iti | bhāva-vikalpo yasya pratipakṣeṇāha | bo(Ns 63b) dhisatvaṃ na  
 samanupaśyatīty evamādi | adhyāropa-vikalpo yasya pratipakṣeṇāha |

rūpaṃ śāriputra svabhāvena śūnyam iti | apavāda-vikalpo yasya pratipa- Ba.75  
kṣeṇāha | na śūnyatayēti | ekatva-vikalpo yasya pratipakṣeṇāha | yā  
rūpasya śūnyatā na tad rūpaṃ iti | nānātva-vikalpo yasya pratipakṣeṇā-  
ha | na cānyatra śūnyatāyā rūpaṃ rūpaṃ eva śūnyatā śūnyatāiva rūpaṃ  
iti | svalakṣaṇa-vikalpo yasya pratipakṣe(Nc 52a)ṇāha | nāma-mātram  
idaṃ yad idaṃ rūpaṃ iti | viśeṣa-vikalpo yasya pratipakṣeṇāha | rūpa-  
sya hi nōtpādo na nirodho na saṃkleśo na vyavadānam iti | yathā-  
nāmārthābhīniveśa-vikalpo yasya pratipakṣeṇāha | kṛtrimaṃ nāmēty  
evamādi | yathārtha-nāmābhīniveśa-vikalpaś ca yasya pratipakṣeṇāha |  
tāni bodhisatvaḥ sarva-nāmāni na samanupaśyaty asamanupaśyan nā-  
bhīniviśate yathārthatayēty abhiprāyaḥ |

**iti śubha-matir etya yatnam ugram**

**dvaya-paryeṣita-dharmatā-sat<sup>itr)</sup>atvaḥ |**

**pratiśaraṇam ataḥ sadā prajānām**

**bhavati guṇaiḥ sa samudravat prapūrṇaḥ || XI. 78**

anena nigamana-ślokena paryeṣṭi-māhātmyaṃ trividhaṃ darśayati |  
(Ns 64a) upāya-māhātmyam ugra-vīryatayā saṃvṛti-paramārtha-satya-  
dharmatā-paryeṣanataś ca tatvaṃ satyam ity arthaḥ | parārtha-māhā-  
tmyaṃ pratiśaraṇī-bhāvāt prajānām | svārtha-māhātmyaṃ ca guṇaiḥ  
samudravat prapūrṇatvāt |

mahāyāna-sūtrālaṃkāre dharma-paryeṣṭy-adhikāra ekādaśaḥ

## 略 号

\*表示は従来の私の発表した論文に準ずる。

L.=Lévi 本

Ba.=Bagchi 本

Ui 宇井伯寿博士

Nagao 長尾雅人博士

Yamaguchi 山口益博士

Umino 海野孝憲教授

註

- 1) L. -ād avipratisāreṇa (L. の仏訳 -ādikrameṇa) Ba. ādikrameṇa Nc. ādinumeṇa or ādinraneṇa (ādikrameṇa ?) Tib. la sogs paḥi rim gis
- 2) L. vidhārthaḥ Ba. vidhārthaḥ Ns. arthāḥ Nc. arthāḥ
- 3) L. karmanaḥ (L. の仏訳 karmaṇām) Ba. karmaṇām Ns. karmanaḥ Nc. karmanaḥ Tib. las
- 4) L. samavadyotaḥ (L. の仏訳 samavaghātaḥ) Ba. samavaghātaḥ Ns. samavadyotaḥ or samavaghātaḥ Nc. samavadyotaḥ (?)
- 5) L. paryāyeṇa | ajñānāt (L. の仏訳 paryāyeṇānujñānāt) Ba. paryāyeṇānujñānāt Ns. paryāyeṇānujñānāt Nc. paryāyeṇānujñānāt
- 6) L. vedāpattiḥ (L. の仏訳 ced āpattiḥ) Ba. cedāpattiḥ Ns. cedāpattiḥ or vedāpattiḥ Nc. cedāpattiḥ
- 7) L. ākaraiḥ (L. の仏訳 ākārāiḥ) Ba. ākārāiḥ Ns. ākārāiḥ
- 8) L. āpannābhāve (L. の仏訳 āpattyabhāve) Ba. āpattyabhāve Ns. āpattyabhāva (or āpattyabhāve) Nc. āpattyabhāva  
 \* āpattyabhāva-dharmatā ? (Tib. ~med paḥi chos ñid)
- 9) L. dharma (L. の仏訳 dharmatā) Ba. dharmatā Ns. dharma Nc. dharma Tib. chos ñid
- 10) L. yadā'rocite Ba. yadā'rocite Ns. yadā'rocite Nc. yadā'rocite Nagao. yadārocite
- 11) L. saṃghaśikṣāṃ (L. の仏訳 saṃghaṃ śikṣāṃ) Ba. saṃghaṃ śikṣāṃ Ns. saṃghaśikṣāṃ Nc. saṃgheśikṣā ? B. saṃghaśikṣāṃ
- 12) L. ナシ (L. の仏訳 dvayam) Ba. dvayam Ns. dvayaṃ Nc. dvayaṃ
- 13) L. ナシ (L. の仏訳 dvayor dvayārthena lābho dvayor anupalambhataḥ ||)  
 Ba. lābho dvayor dvayārthena dvayoś cānupalambhataḥ ||  
 Ns. lābho dvayodvayārthena dvayoś cānupalambhataḥ |  
 (dvayo(r)dvaya or dvayādvaya)  
 Nc. lābho dvayor dvayārthena dvayāś (dvayoś) cānupalambhataḥ ||  
 Nagao. lābho dvayor dvayārthena dvayoś cānupalambhataḥ |  
 Tib. don gñis kyi ni gñis po rñed



漢訳「得二無二義」（大正31. 610b）

世説釈 dvayor……dvayārthena lābho

- 14) L. ナシ  
Ba dharmāmbanaṃ yo deśitaḥ kāyādikañ cādhyātmikaṃ  
Ns dharmāmbanaṃ yo deśitaḥ kāyādikañ cādhyātmikaṃ  
Nc. dharmāmbanaṃ yo deśitaḥ kāyādikaṃ cādhyātmikaṃ  
Nagao dharmāmbanaṃ yo deśitaḥ kāyādikaṃ cādhyātmikaṃ
- 15) L. ādhyātmikaṃ bāhyaṃ ca |  
Ba. ādhyātmikabāhyañ ca |  
Ns. ādhyātmikabāhyañ ca |  
Nc. ādhyātmikābāhya ca |  
B. ādhyātmikabāhyañ ca |  
Nagao. ādhyātmika-bāhyañ ca |
- 16) L. tathatādvayaṃ (L の仏訳 tathatā dvayam) Ba. tathatā dvayam
- 17) L. | śrutamayena……tallābhaḥ  
(L の仏訳 śrutamayena……tallābhaḥ |)  
Ba. | śrutamayena……tallābhaḥ,  
Ns. śrutamayena……tallābhaḥ |
- 18) L. 'lpajalpa (L の仏訳 'pajalpa or 'jalpa)  
Ba 'jalpa Ns. 'jalpa Nc. 'jalpa
- 19) L. ナシ Ba ナシ Ns. yoga Nc. yoga Tib. rnal ḥbyor
- 20) L. ナシ (L の仏訳 nirvitarka-savicāra) Ba. avitarka-vicāra Ns. avitarka-savicāra Nc. avitarka-savicāra Nagao. avitarka-vicāra
- 21) L. vinirdhāvanā- (L の仏訳 nirvighāṭanā) Ba. nirvirghāṭanā-(nirvighāṭanā)  
Ns. vinirdhāvanā- Nc. vinirdhāvanā- Pradhan: Abhidharmakośa-bhāṣya  
p. 410, l. 18 vinirdhāvana
- 22) L. pradadhāti Ba. pragrḥṇāti Ns. pradadhāti Nc. pradadhāti Nagao.  
pragrḥṇāti (Tib) Tib. rab tu ḥdsin pa
- 23) L. pragrḥṇāti Ba. pradadhāti Ns. pragrḥṇāti Nc. pratigrḥṇāti?
- 24) L. saṃprakṣaṇā Ba. saṃprakṣaṇā Ns. saṃlakṣaṇā Nc. saṃlakṣaṇā Tib.  
ṣes pa
- 25) L. -kāra Ba. ākāra Ns. ākāra Ui. ākāra
- 26) L. sthity Ba. sthity Ns. cittasthity Nc. cittasthity Tib. sems gnas pa

漢訳「心住」(大正31. 611b)

- 27) L. srotasi Ba. srotasi Ns. śrotasi Nc. śrotasi  
 28) Ns.Nc. artha-parikalpam が欠  
 29) L. tatva Ba. tatva Ns. tatvārtha B. tatvārtha Tib. de kho na ñid kyi don  
 30) L. tatra Ba. tatra Ns. tata Nc. tataḥ Tib. te la  
 31) L. abhinnatvāta Ba. abhinnatvāt Ns. abhinnatvāt  
 32) L. mājā yantra-(L の仏訳 mājā mantra-) Ba. mājā mantra- Ns. mājā-mantra- Nc. mājāmaṇtra-(欄外表示) Tib. sgyu maḥi śhags kyis  
 33) L. svabhāvo Ba. svabhāvākāro Ns. svabhāvo Nagao svabhāvākāro (Tib) Tib. ño bo ñid kyi rnam par cf. Lévi 本 p. 59 l. 8 svabhāvākārā  
 34) L. patiḥ (L の仏訳 yatiḥ) Ba. yatiḥ Ns. yatiḥ Nc. yatiḥ Tib. sdom brtson  
 35) L. tathā 'śraya- Ba. tathā ss 'śraya- Ns. tathā 'śraya-  
 36) L. nāsau na bhāvaḥ Ba. nāsau na bhāvaḥ Ns. nāsau na bhāvaḥ Nc. nāsau na bhāve (?) Ui. asau nābhāvaḥ (?) Tib. yod pa gañ yin pa de ni med ba na yin no  
 37) L. nāsau na bhāvaḥ Ba. nāsau bhāvaḥ Ns. nāsau na bhāvaḥ Nc. nāsau na bhāvaḥ Nagao. nāsau bhāvaḥ (Tib.) Tib. med pa gañ yin pa de ni yod pa ma yin no  
 38) L. dvayābhatātrāsti Ba. dvayābhatātrāsti 本文(dvayābhāsātātrāsti?) Ns. dvayabhatā'trāsti Nc. dvayebhemā'trāsti? Yamaguchi. ābhāso 'trāsti Tib. gñis snañ de la yod Nagao. ābhatā (Tib. snañ)  
     \* ābhatā は ābhasatā の意。シラブルの関係で ābhatā となっている。  
     \* 長行には dvayābhāsātāsti とある。  
 39) L. yā dvayatānāstitā Ba. yā dvayatānāstitā Ns. yādvayatānāstitā (yā dvayatā nāstitā?)  
 40) L. āpavādābha (L の仏訳 āpavādānta) Ba. āpavādānta Ns. āpavādānta Nc. āpavādānta  
 41) L. āpavādābha (L の仏訳 āpavādānta) Ba. āpavādānta Ns. āpavavādānta? Nc. āpavavādānta?  
 42) É. Lamotte : Mahāyānasamgraha p. 98 (佐々木本 p. 32) 参照。  
 43) L. grāhya (L の仏訳 grāha) Ba. grāha Ns. grāhya Nc. grāhya Tib.

ḥdsin pa

- 44) L. pratibimbaṃ saṃkalikāṃ (L の仏訳 pratibimba-saṃkalikāṃ) Ns. pratibimbasaṃkalikāṃ or pratibimbasaṃkalikāṃ Nc. pratibimbaṃsakalikāṃ
- 45) L. ābhāvaviśeṣataḥ (L の仏訳 ābhāvāviśeṣataḥ) Ba. ābhāvāviśeṣataḥ Ns. ābhāvāviśeṣataḥ Nc. ābhāvāviśeṣataḥ
- 46) L. tathābhāvād Ba. tathābhāvād Ns. tathābhāvād Tib. de bshin yod paḥi phyir 27偈(a) tathā bhāvāt
- 47) L. lakṣanās (L の仏訳 lakṣaṇā |) Ba. lakṣaṇā Ns. lakṣanās tasmāt Nc. lakṣanās tasmāt
- 48) L. 'bhāvāt Ba. 'bhāvāt Ns. 'bhāvāt Nc. 'bhāvāt Ui. bhāvāt? Tib. med
- 49) L. 'bhāvāt Ba. 'bhāvāt Ns. 'bhāvāt Nc. 'bhāvāt Tib. yod
- 50) L. 'bhāvāt Ba. 'bhāvāt Ns. 'bhāvāt Nc. 'bhāvāt Tib. med paḥi phyir (デルゲも同じ) Ui. bhāvāt? 漢訳「有体故」
- 51) L. 'bhāvāt Ba. 'bhāvāt Ns. 'bhāvāt Nc. 'bhāvāt Tib. yod paḥi phyir (デルゲも同じ) 漢訳「無体故」
- 52) L. ya (L の仏訳 ye) Ba. ye Ns. ye Nc. ye
- 53) L. nirmārās (L の仏訳 nirmānās) Ba. nirmārās Ns. nirmānās Nc. nirmānās Tib. ŋa rgyal med (デルゲも同じ)
- 54) L. māyārājñeva (L の仏訳 rājñeva?) Ba. rājñeva Ns. māyārājñeva Nc. māyārājñeva Tib. rgyal pa (北京版, デルゲ版) 漢訳「幻王」
- 55) L. nirmārā (L の仏訳 nirmānā) Ba. nirmārā Ns. nirmānā Nc. nirmāṇā
- 56) L. saṃkleśa Ba. saṃkleśa Ns. saṃkleśa
- 57) L. bhāvāṅgād (L の仏訳 svabijād) Ba. svabijād Ns. svabijād Nc. svabijād Tib. rañ gi sa bon
- 58) L. | bhāvanāmārgeṇa (L の仏訳 bhāvanāmārgeṇa |) Ba. bhāvanāmārgeṇa (| bhāvanāmārgeṇa) Ns. bhāvanāmārgeṇa Nc. bhāvanāmārgeṇa
- 59) L. eva Ba. evaṃ Ns. evaṃ Nc. evaṃ Ui. evaṃ Tib. de ltar
- 60) L. na tadanyo Ba. na tadanyo Ns. vā na tu Nc. vā na tu Umino vā na tu
- 61) L. lakṣaṇaḥ | iti Ba. lakṣaṇaḥ | iti Ns. lakṣaṇa iti Nc. lakṣaṇa iti
- 62) L. tathā (L の仏訳 tatra) Ba. tathā Ns. tacca Nc. tacca Ui tatra
- 63) L. mataḥ (L の仏訳 tataḥ) Ba. mataḥ Ns. atas Nc. atas Ui tatas
- 64) yathā dvaya.....pravartate || 35 || (L の仏訳 iti cittaṃ.....dharmaṇāṃ mataḥ

|| 35 ||

Ns. cittam citrābhāsaṃ.....atas tatra || 35 ||

Nc. cittam citrābhāsaṃ.....atas tatra || 35 ||

Ui iti cittam.....dharmābhāsaṃ tataḥ || 35 ||

Umino cittam citrābhāsaṃ.....atas tatra || 35 ||

Tib. sems ni sna tshogs snañ ba dañ ||.....|| de phyir chos kyi na yin no || 35 ||

65) L. vastu Ba. vastutaś Ns. svataś (?) Nc. svatac A. svatac B. svatac  
Nagao. vastutaś (Tib.) Ui. vastutaś Tib. ḥdi ṇid (?) (eva ca tac ?) Umino. ca  
tac

66) L. kuśalānām (L の仏訳 kliṣṭānām kuśalānām vā) Ba. kliṣṭānām  
kuśalānām vā Ns. kuśalānān Nc. kuśalānām Tib. ṇon moṅs pa can dañ  
dge ba

67) L. atha Ba. artha Ns. artha Nc. artha Nagao. artha Tib. don

68) L. ナシ Ba. ナシ Ns. ca Nc. ca Tib. dañ

69) L. nimittam evaṃ (L の仏訳 nimittam eva) Ba. nimittam evaṃ (nimittam  
eva) Ns. nimittam evaṃ Nc. nimittam evaṃ Nagao. nimittam | evam  
(Tib.) Tib. rgyu mtshan yin no || de ltar na

70) L. asaṃkalpa Ba. asaṃkalpa (asatkalpa ?) Ns. asatkalpa Nc. asatkalpa

71) L. prathama (L の仏訳 prathamas) Ba. prathamas Ns. prathama Nc.  
prathamam

72) L. parikalpitā nābhāvatā Ba. parikalpitānām bhāvatā Ns. parikalpitā-  
nām bhāvatā Nc. parikalpitānām bhāvatā Nagao. parikalpitānām (l) bhāva-  
tā (Tib.)

73) L. pariśaddhatvāt Ba. pariśuddhatvāt Ns. pariśuddhatvāt Ui pariśud-  
dhatvāt

74) L. kleśa Ba. saṃkleśa Ns. kleśa Nc. kleśa Nagao saṃkleśa (Tib.)  
Tib. kun nas ṇon moṅs pa

75)76)77) L. niṣpanda (L の仏訳 niṣyanda) Ba. niṣyanda Ns. niṣyanda Tib.  
rgyu mthun (pa)

78) L. tathā (L の仏訳 tayā) Ba. tayā Ns. yayā Nc. yayā Ui yayā

79) L. parāvattiḥ Ba. parāvṛttiḥ Ns. parāvṛttiḥ Ui. parāvṛttiḥ

80) L. avikalpe na (L の仏訳 avikalpe) Ba. avikalpe Ns. avikalpena Nc.  
avikalpena or avikalpene

- 81) L. aparaparyāyaḥ (L の仏訳 aparāḥ paryāyaḥ) Ba. aparāḥ paryāyaḥ Ns. aparaparyāyaḥ Nc. aparaparyāya Uī aparaparyāyaḥ (or aparāḥ paryāyaḥ)  
\* Lévi 本 p. 64, l. 23 aparaparyāyo (XI. 39 の長行) 参照。
- 82) L. aparaprakāraś Ba. aparāḥ prakāraḥ Ns. aparaprakāraś Nc. aparaprakāraś
- 83) L. tad ābhāvāc (L の仏訳 tadabhāvāc) Ns. tadabhāvāc Nc. tadabhāvāc
- 84) É. Lamotte : Mahāyānaśaṃgraha p. 128 (佐々木 p. 45) 参照。
- 85) L. punas tena (L の仏訳 punaḥ svena) Ba. punaḥ svena Ns. punas tenātmanā Nc. punas tena Tib deḥi [bdag ñid du]
- 86) L. svabhāva (L の仏訳 svabhāve) Ba. svabhāve Ns. svabhāve Nc. svebhāve
- 87) L. svābhāvāt Ba. svābhāvāt Ns. svabhāvābhāvāt Nc. svabhāvāt A. svabhāvāt B. svabhāvābhāvāt Nb. svabhāvāt Tib. ño bo ñid med paḥi phyir
- 88) L. śacyātto (L の仏訳 śucyātmā) Ba. śucyātmā Ns. śucyātā Nc. śucyātā
- 89) L. の脚注 niḥsvabhāvatayā siddhā uttarottara-niśrayāḥ | (L の仏訳 niḥsvabhāvatayā siddhā uttarottarāniśrayāt)  
Ba. niḥsvabhāvatayā siddhā uttarottarāniśrayāt Ns. Nc. 欠
- 90) É. Lamotte : Mahāyānaśaṃgraha p. 128 (佐々木本 p. 45) 参照。  
L の脚注 anutpādo 'nirodhaś cādīśāntiḥ parinirvṛtiḥ ||  
(L の仏訳 anutpannāniruddhādīśāntaprakṛti-nirvṛtāḥ)  
Ba. anutpannā niruddhādī-śānta-prakṛti-nirvṛtiḥ |  
Ns. Nc. 欠
- 91) L. 欠 (L の仏訳 siddhā) Ba. siddhā Ns. Nc. 欠
- 92) L. niḥsvabhāvatābhir (L の仏訳 niḥsvabhāvatādibhir) Ba. niḥsvabhāvatābhir Ns. niḥsvabhāvatābhir Nc. niḥsvabhāvatābhir Tib. ño bo ñid med pa la sogs pa
- 93) L. anutpatti Ba. anutpatti Ns. anutpattika Nc. anutpattika
- 94) L. anyathā bhāvasyō Ba. anyathābhāvasyō Ns. anyathābhāvasyō Uī anyathābhāvasyō
- 95) É. Lamotte : Mahāyānaśaṃgraha p. 327 (佐々木本 p. 108) 参照。
- 96) L. kṛtvā Ba. kṛtvā | Ns. kṛtvā | Nc. kṛtvā |
- 97) L. kṛtvā (L の仏訳 kṛtvā ) Ba. kṛtvā | Ns. kṛtvā | Nc. kṛtvā ||

- 98) L. kṛtvā Ba. kṛtvā | Ns. kṛtvā | Nc. 欠
- 99) L. caritādanātmani (L の仏訳 caritānām ātmani) Ba. caritānām ātmani  
Ns. caritānām ātmani Nc. caritānām ātmani
- 100) L. baddhāśaya (L の仏訳 buddhāśaya) Ba. buddhāśaya Ns. buddhāśaya
- 101) L. tanā-(L の仏訳 tenā-) Ba. tanā- Ns. tenā Nc. tenā
- 102) É. Lamotte : Mahāyānasamgraha p. 326. (佐々木本 p. 108) 参照
- 103) L. dṛṣṭānte ca (L の仏訳 dṛṣṭāntena) Ba. dṛṣṭāntena Ns. dṛṣṭāntena Nc.  
dṛṣṭāntena or dṛṣṭāntena Tib. dpes
- 104) L. evaṃ Ba. evaṃ Ns. eva Nc. eva Tib. kho na (?)
- 105) L. ナシ Ba. ナシ Ns. tatreyamādigāthā Nc. tatrayamādigāthā (or  
tatreyamādigāthā) Tib. de la tshigs su bcad pa dan po ni ḥdi yin te
- 106) L. niśraya Ba. niśraya Ns. niśraye Nc. niśraye Tib. rten la.
- 107) L. niṣṣyandaphala Ba. niṣṣyandaphala Ns. niṣṣyandaphala Nc. niṣṣyan-  
daphala A. niṣyandaphala B. niṣṣyandaphala NB niṣyandaphala Ui  
niṣyandaphala
- 108) L. abhisamskaraṇāt paramabodhiprāptaye |  
Ba. abhisamskaraṇāt paramabodhiprāptaye |  
Ns. abhisamskaraṇāt paramabodhiprāptaye |  
Nc. abhisamskaraṇāt paramabodhiprāptaye |  
Tib. mñon par ḥdu byed paḥi phyir ro || byañ chub dam pa thob par ḥgyur  
baḥi phyir  
Ui 「(不疲倦決定を)作すからである。最高菩提を得んがために、(所対治と能対  
治)」  
漢訳「我今、為得無上菩提、於諸波羅蜜 応起四種随修」(大正31, 616b)
- 109) L. daśanām Ba. deśanām Ns. deśanām Nc. deśanām Ui deśanam  
(deśanām?)
- 110) L. prāptaye Ba. pratyaye Ns. pratyaye Nc. pratyaye Nagao. pratyaye  
Tib. rkyen 漢訳「諸縁」
- 111) L. āpañca (L の仏訳 ārthaṃ ca) Ba. ārthañ ca Ns. āthañca or ārthañ ca  
Nc. āpañca?: Tib don du
- 112) L. pratisamvedanād (L の仏訳 pratisamvedanā) Ba. pratisamvedanā  
Ns. pratisamvedanāt Nc. pratisamvedanā or pratisamvedanād  
A. pratisamvedanā or pratisamvedanād B. pratisamvedanāt

- Nb. pratisaṃvedanā or pratisaṃvedanād Tib. so so yañ dag rig
- 113) L. āsadgrāha Ba. āsadgrāha Ns. āsadgrāha? Nc. āsaṃgrāha Tib. log  
par ḥsin pa
- 114) L. śūnyatā Ba. śūnyatādi Ns. śūnyatādi Nc. śūnyatādi Nagao.  
śūnyatādi Tib. stoñ pa ñid la sogs pa
- 115) L. caturvidhamanaskāraḥ | caturvidham  
Ba. caturvidhasaṃjñāmanaskāraḥ | caturvidham  
Ns. caturvidhamanaskāraś caturvidham  
Nc. caturvidhamanaskāraś caturvidham  
Nagao. caturvidhasaṃjñāmanaskāraḥ | caturvidham  
Tib. ḥdu ṣes rnam pa bshi yid la byed pa……
- 116) L. ābhinivartanāt (L の仏訳 ābhinivartanāt) Ba. ābhinivartanāt Ns.  
ābhinivarttanāt Nc. ābhinivarttanāt Tib. mñon par ḥgrub pa.
- 117) L. āvasthāpanāt tad (L の仏訳 āvasthāpanā tad) Ba. āvasthāpanāt (āvasth-  
āpanā?) tad Ns. āvasthāpanā | tad Nc. āvasthāpanā || tad Tib. ḥjog pa  
[dañ]
- 118) L. śarudibhyaḥ (L の仏訳 śakrādibhyaḥ) Ba. śakrādibhyaḥ Ns. śanudi-  
bhyaḥ or śanudibhyaḥ or śakradibhyaḥ? Nc. śannudityaḥ? B. śakradibhyaḥ  
Tib. brgya byin la sogs pa
- 119) L. nirapekṣatā Ns. nirapekṣatānām | Nc. nirapekṣatānām ||
- 120) L. 欠 (L の仏訳 viśiṣṭa) Ba. [viśiṣṭa] Ns. 欠 Nc. 欠 Tib. mñon par  
ḥphags pa (My 6388 abhyudgata) 漢訳「勝〔身〕」
- 121) 諸写本や Lévi 本に従い、sattveṣu→satveṣu と表示する。
- 122) L. 欠 (脚注 anantā ca mahārthā ca sahadāna-parivṛttiḥ | naiṣṭhiki nirantarā  
ca tathā pañcavidhā smṛtā || 69 ||)  
(L の仏訳 samatā sarvasattveṣu dṛṣṭiś cāpi mahātmikā |  
paraguṇaprātikāras trayāśānstir nirantarāḥ || 69 ||  
Ba. samatā sarvasattveṣu dṛṣṭiś cāpi mahātmikā |  
paraguṇa pratikāras trayāśāstir nirantarāḥ || 69 ||  
Ns. 欠 Nc. 欠 私の還元梵語→『印度学仏教学研究』(第35巻第1号) p. 24で  
発表。
- 123) Lévi 本に従って sattveṣu→satveṣu と表示する
- 124) [ ]内は Ns 本、Nc 本などが欠けているため、Lévi の還元梵語。但し69偈(c-

d) は私の訂正。

- 125) L. pratyayakārā (L の仏訳 pratyupakārā) Ba. pratyupakārā Ns. pratyupakārā Nc. pratyupakārā
- 126) L. satvāvaraṇā (L の仏訳 sattvārthâcaraṇā) Ba. sattvārthāvaraṇā Ns. satvāthataṛaṇā (satvārthacaraṇā?) Nc. satvārthataṛaṇā Tib. sems can gyi don byed pa
- 127) L. avadhya (L の仏訳 abandhya) Ba. abandhya Ns. avandhya Nc. avandhya
- 128) L. cetanāt (L の仏訳 cetanā) Ba. cetanā Ns. cetanāt Nc. cetanāt
- 129) L. prativarṇikāyāṃ bhūtāyāṃ (L の仏訳 prativarṇikābhūtāyāṃ) Ba. prativarṇikābhūtāyāṃ Ns. prativarṇikāyāṃ bhūtāyāṃ Nc. prativarṇikāyāṃ bhūtāyāṃ
- 130) L. vyākṛta- Ba. vyākṛta- Ns. vyākṛte Nc. vyākṛte
- 131) L. prativarṇikā bhāvanāyāṃ (L の仏訳 prativarṇikābhāvanāyāṃ) Ba. prativarṇikābhāvanāyāṃ Ns. prativarṇikābhāvanāyāṃ
- 132) L. āvadhāraṇāt (L の仏訳 āvadhāraṇā) Ba. āvadhāraṇā Ns. āvadhāraṇāt Nc. āvadhāraṇāt Tib. nes ḥdsin phyir Comm. agratvātmāvadhaṛaṇamanaskāraḥ
- 133) L. yātvā gatiṃ (L の仏訳 yāṃ yāṃ gatiṃ) Ba. yāṃ yāṃ gatiṃ Ns. yātmaṃ or yāsmaṃ Nc. yāstāṃ gatiṃ Tib. phan chad ḥgro ba gaṇ du  
 \* Ns. yāsmaṃ は yasmim と類似しているし、Tib. gaṇ du は yasmim の訳と思われる。
- 134) L. 'bhisamskāraṇāt | dānādīnāṃ (L の仏訳 'bhisamskāraṇāt dānādīnāṃ |)  
 Ba. 'bhisamskāraṇāt | dānādīnāṃ  
 Ns. 'bhisamskāraṇāt dānādīnāṃ |  
 Nc. 'bhisamskāraṇāt dānādīnāṃ ||  
 Tib. sbyin pa la sogs pa.....mñon par ḥdu byed paḥi phyir yo ||
- 135) L. dharbha Ba. dharma Ns. dharma Ui. dharma
- 136) L. bhede (Ms śubhede) Ba. bhede Ns. prabhede Nc. prabhede Tib. rab tu dbye ba
- 137) L. laghukāyā Ba. labdhakāyā Ns. labdhakāyā? Nc. labdhakāyā Nagao. labdhakāyā
- 138) L. bahumāna Ba. bahumāna Ns. bahumānā Nc. bahumānā



\* 韻律の上からは bahumāna（短音 a が必要）がよい。

- 139) L. cittatva (L の仏訳 vibhutva-) Ba. vibhutva- Ns. vibhutva- Nagao. vibhutva
- 140) L. laghukāyā Ba. labdhakāyā Ns. labdhakāyā? Nc. labdhakāyā Nagao. labdhakāyā
- 141) L. cārogyaṃ (L の仏訳 cārogye) Ba. cārogye Ns. cārogyo Nc. cārogyo
- 142) 『梵天所問經』の四法品第二（大正15, 35c）参照。
- 143) L. dharbhaiḥ（誤植） Ns. dharmaiḥ
- 144) L. kalpa Ba. kalpa Ns. kalpā Nc. kalpā
- 145) L. kalpāḥ Ba. kalpāḥ Ns. kalpā Nc. kalpā
- 146) 『大般若波羅蜜多經』卷四（大正 5, 17b-c）、Ghoṣa. śatasāhasrikāprajñāpāramitā p. 118
- 147) L. svatatvaḥ Ba. satattvā Ns. satatvaḥ Nc. satatvaḥ Nagao. satattvā